

目次

巻頭図版

例言・引用文献

はじめに一遺跡の概要と本書の構成についてー 21

大友氏遺跡とは／遺跡の概要／土地の変遷／本書の目的と構成／本書の視点

第1章 大友氏遺跡事業の経過 22

1. 遺跡発見まで（大正～昭和年間）

府内古図と戦国時代末の府内復原図／確認調査と遺構の発見

遺跡発見までの顕徳町／顕徳町3丁目の変遷

【インタビュー① 顕徳町の風景】 27

2. 大友氏館跡の「発見」 31

大友氏館跡第1次調査／大友氏館跡第2次調査

【インタビュー② 遺跡発見当時のこと】 32

3. 史跡指定までのみちのり 33

国史跡指定に向けて／大友遺跡検討委員会の設置／意向調査／市報おおいた特集号

4. 史跡指定と記念事業 35

指定理由／中世大友再発見フォーラム／大友河原市

5. 発掘調査の進展と大友氏遺跡へ 38

進む発掘調査／旧万寿寺跡の調査と追加指定

6. 様々な史跡活用の取組 38

アート循環系サイトと大友館／市民団体による情報発信／七夕まつりの変化／大友氏関連フェスタの開催

7. 進む大友氏遺跡の保存活用に関する取組 40

おおいた都心まちづくり会議との連携／大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会の設置

【コラム 良く聞かれる大友氏館跡の表記方法】 41

【特別寄稿】「文部科学省5階のエレベーターホール」 42

【インタビュー③ 発掘作業員さんが語る大友氏遺跡】 43

8. 公有化拡大期 45

公有化事業の現状／解明が進む大友氏遺跡

9. 情報発信基地の整備と多様な活用施策 47

情報発信基地の整備／市民との協働／遺跡看板整備／史跡整備班の設置／大友プロモーション事業／

キリシタン・南蛮文化交流協定協議会事業／南蛮文化発祥都市宣言／ヤギのいる史跡

10. 整備基本構想と基本計画の策定 49

保存管理計画／整備基本構想／整備基本計画

第2章 大友氏遺跡の現状	51
1. 史跡整備事業	
史跡の公有化の現状／第1期短期整備（庭園整備）／基本計画の改訂／ 大分市歴史的風致維持向上計画の策定	
2. 遺跡の活用事業の現在	52
文化財活用推進担当班の設置／南蛮BVNGO交流館の設置／ FUNAIジュニア検定とFUNAIジュニアガイド／ボランティアガイド組織の立ち上げ／ 大友氏館跡庭園ガイド／情報発信コンテンツの強化／その他の活動	
3. 大友氏遺跡の価値の追加	53
重要文化財指定	
4. 新たな動き	53
協働まちづくり大賞	
 第3章 大友氏遺跡の今後	54
計画の期間／遺構復元計画の内容／復元された建物等の活用／情報発信／学校教育との連携	
おわりに—未来につなぐ—	55
1. 大友氏遺跡の特殊性	
都市公園としての大友氏遺跡	
2. 20年のあゆみをふりかえって	
価値の更新／未来につなぐ／今後の展望	
【インタビュー④ 顕徳町3丁目元自治委員さんからみた大友氏遺跡事業】	58
 【資料編】	63
大分市教育委員会における文化財行政組織の変遷①・②	64
大友氏遺跡事業年表①～③	66
大友氏遺跡の主な広報及びイベント一覧①～③	69
シンポジウム・講座一覧①～③	72
大友氏遺跡体験学習館イベント一覧	75
南蛮BVNGO交流館イベント一覧	76
刊行物一覧	77

はじめに一遺跡の概要と本書の構成について—

大友氏遺跡とは 大友氏遺跡は、大分市街中心部の東部に位置し、14世紀から16世紀末にかけて大分川の河口に近い左岸の自然堤防上に立地した「中世大友府内町跡」の中核をなす遺跡である。「大友氏館跡」・「旧万寿寺地区（旧万寿寺跡、武家地、商業店舗地、手工業者地）」・「唐人町跡」・「推定御蔵場跡」・「上原館跡」の5つの遺跡（図1）から構成されている。



図1 大友氏遺跡の範囲

遺跡の概要 個々の遺跡については、1章にて述べるため、ここでは中世大友府内町跡の概要を記載する。

中世大友府内町跡は、徳治元年（1306）に大友氏5代当主大友貞親によって創建された万寿寺の出現を起点に、街路や寺社、公的施設が段階的に整備された。16世紀後葉頃には日本有数の国際貿易都市として発展し、大友氏が永く拠点とした場所である。天正14年（1586）の島津氏による府内侵攻後も復興をとげ、慶長7年（1602）の近世城下町移転まで都市として存在した。これまでの発掘調査成果によると、16世紀後半に遺構・遺物が質・量ともに最大化し、史実に示される南蛮貿易の推進により繁栄した府内のまちとなる。この時期は、数百年続いた府内のまちを最も象徴的に特徴づけるものであり、他の都市にはみられない中国・朝鮮半島・東南アジア地域との貿易により繁栄した「国際貿易都市」と、「戦国大名の館を中心に発展したまち」という二つの性格を併せ持つという特性を持つ。また、キリスト教宣教師の報告をはじめとする多くの文献

史料が残る点も大きな特徴であり、全国に先駆けて東洋文化と西洋文化の出会いの場となり、独特の南蛮文化を育んだ地であることを窺い知ることができる。このように大友氏遺跡は世界と深いかかわりをもつ遺跡である。

土地の変遷 江戸時代になると府内のまちは、築城を開始した府内城周辺の城下町として移転する。このため、戦国時代の府内のまちエリアは主に田畑として利用された。このような歴史的な背景から、遺跡の遺存状況は良好であり、中世の地割の痕跡などが現在まで比較的良く残されている。なお、大友氏館跡や唐人町跡は大分市顕徳町3丁目に位置し、遺跡の所在するJR日豊本線以北は第二次世界大戦後急速に宅地化が進んだ。一方、旧万寿寺地区や推定御蔵場跡以南においては、工場や病院、国道10号沿道に店舗などの施設が立地するものの、主に農地として利用されており、中世の地割をよく残していた地域であった。近年は、大分駅周辺総合整備事業の一環として、国道10号拡幅・都市計画道路庄の原佐野線の新設等、都市交通インフラの整備が急ピッチで進展し、当時の地割は遺しつつもその景観は大きく変貌し現在に至る（巻頭図版1・2）。

本書の目的と構成 大友氏遺跡事業は、平成13年（2001）8月13日に大友氏館跡が国史跡に指定され、公有化事業が開始されてから今日まで20年に及ぶ歴史があり、現在も進行中である。長期に及ぶ事業であることから、指定当時の状況を知る関係者も官民ともに少なくなり、事業主体である本市職員の世代交代も進んでいる。このため、本事業と地域住民との関わりや土地利用の変遷（履歴）などといった遺跡と密接につながる情報も伝えることが難しくなってきた。

本書は、こうした背景と、史跡指定から20年の節目を迎えたことを契機に、遺跡発見の端緒となった大友氏館跡を中心に、大友氏遺跡の事業経過と、これと関係の深い方々の証言を交えながら、現在に至る大友氏遺跡事業のあゆみを将来に伝えるべく作成するものである。

第1章では概ね昭和年間から平成27年ごろまでを対象に、遺跡発見以前の顕徳町の様子から発掘調査、史跡指定、整備計画の立案までの過程を記載する。第2章で

は第1期整備計画の短期整備計画に位置付けられた庭園遺構の整備と、現在までの遺跡の活用概要をまとめ、第3章では、「史跡大友氏遺跡整備基本計画（第1期）令和元年度改訂版」を基に、遺跡の将来計画を記載する。巻末には、資料編として、文化財課の組織編成、遺跡の土地変遷を軸とした大友氏遺跡の事業年表、関連する活用事業や刊行物の一覧を収録している。

本書の視点 遺跡が文化的な意味を持つ場となる上では、行政は保存や活用を担う関係者の1つにすぎない。公が主導して遺跡を保存し、国指定史跡として「国民の遺跡」になったとしても、これが地域住民から乖離した状態となることが最も憂慮する状況である。そのようにならないためにも、遺跡に対する人々の「思いの継続」が重要と考える。この視点で見たとき、現在の史跡の状況は地域の人々にとって「守り伝えていきたい場所」となっているだろうか。都市の中であって、人と人とを結び付ける場、空間となっているだろうか。

整備が進む大友氏館跡が所在する顕徳町は、平成19

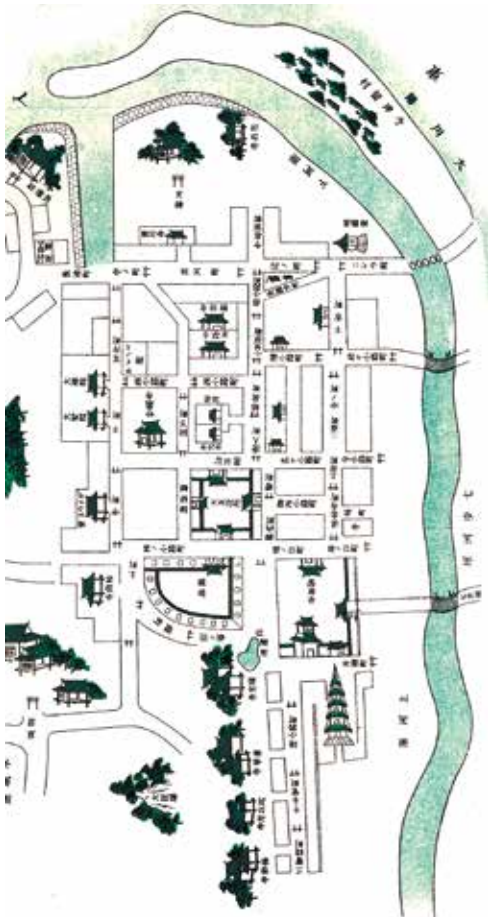


図2 「舊府内城下圖（旧府内城下図）」（部分）

年より歴史公園整備事業に先立つ土地の公有化事業が拡大し、386あった3丁目の世帯数は139まで減少したという現状がある。現在世帯数は再び増加傾向にあるものの、遺跡が見つかり整備されていくなかで、遺跡は市民（地元）にどのような影響を与え、結果として市民にはどのような変化をもたらしたのだろうか。

こうした問題意識のもと、各項目には関係者のインタビュー記事を掲載し、当時の様子が複数の立場から見えるよう考慮した。地域の視点からみた大友氏遺跡事業の位置づけにも触れ、双方向的な視点でこの20年のあゆみを考えてみたい。

第1章 大友氏遺跡事業の経過

1. 遺跡発見まで（大正～昭和年間）

府内古図と戦国時代末の府内復原図 かつて大友館が所在した戦国時代の都市「豊後府内」については、それを描いた古絵図「府内古図」が古くから知られており、そこに描かれた大友氏の館にも留意されていた。すでに大正4年（1915）に刊行された『大分市史』において、「大友役所」と注記された施設が描かれた古絵図が「舊府内城下圖」（図2中央）として紹介され、同図の解説文「舊府内城下圖説」には、上野台地上の「御屋敷と称する処」にある「舊府城の址」（現在の上原館跡）との違いも解説されていた（大分市1915）。

昭和30年版『大分市史』上巻では、中世から現在までに位置が変わっていないと考えられる建物等を基準として、古絵図を現代の地図上に比定する作業が詳細に試

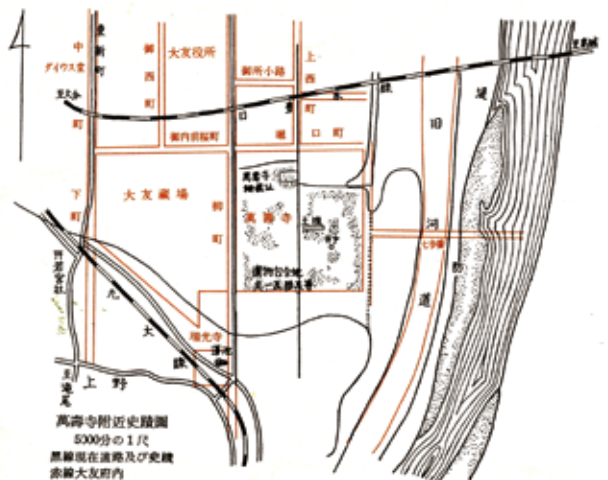


図3 昭和30年版『大分市史』における現地比定図（図中左上が大友館（大友役所））



図4 「戦国時代の府内復原想定図」と
中世大友府内町跡発掘調査位置図

みられた。この時点で、大友館にあたる「大友役所」の位置は、概ね現在の史跡指定地付近に比定されていた（図3）（大分市1965）。当時大分大学で教鞭をとっていた渡辺澄夫教授（中世史）は、古絵図を検討する中で、絵図の描画形式や内容自体には疑問を表明しながらも、「天正十六年参宮帳」⁽ⁱ⁾に記載された府内の町名のうち8町が古絵図記載地と一致することを指摘し、古絵図には一定の信憑性があるとして、将来豊後府内町の研究の足がかりとなることを予察している（渡辺1965）。

こうした中、昭和62年（1987）に刊行された『大分市史』において画期的な「戦国時代の府内復原想定図」（中巻付図）が作成される（図4）。これは古絵図上の情報



図5 中世大友府内町跡調査地点位置図

を明治時代の旧字図上の地割や距離、古絵図上にある寺社で現在と場所が変わらないものの位置と比較検討し、数限りない現地踏査を行うなど、綿密な歴史地理学的作業を経て1/2500の都市基本図と重ね合わされたものであった。それによれば、「大友館」は国道10号以南・以東、JR日豊本線以北の顕徳町3丁目南東部のおよそ二町（約200m）四方の土地に比定されていた。

一方、古絵図についての研究も進展をみせた。『大分市史』編纂時に、現存中最古とみられる絵図（巻頭図版4）が発見されていたが、木村幾多郎氏は、絵図の描写方法や書き込まれた情報の内容およびその多寡等により、古絵図をA・B・C類の3種に分類し、『大分市史』

(i) 「天正十六年参宮帳」 豊後国・肥後国・豊前宇佐郡・日向土持庄から伊勢参りに来た人々の名前や住所・日付を書き留めたもの。天正16年から19年（1588～1591）の三年間の内容が記されている。当該期の参宮者の中に豊後府内の住人約70名前があり、多くが町（唐人町・桜町など）を単位に参宮していることがわかる。

編纂時発見の絵図を含む A 類を最古相として A 類→B 類→C 類の順に変遷したと推定した（木村 1993）。さらに A 類上に寛永 13 年（1636）に発見された大臣塚古墳（大臣塔）が記載されていることに注目して、古絵図の成立年代を寛永 13 年以降とし、B 類に天保 5 年（1834）、C 類に文政 12 年（1829）の年号が記載された例があることから、成立年代の下限を文政 12 年以前とした。

平成 8 年（1996）から始まる中世大友府内町跡の発掘調査によって、「戦国時代の府内復原想定図」に概ね合致する調査結果が得られてきており、「府内古図」の信憑性も裏付けられつつある。こうした調査研究の進展に

伴い、『大友館と府内の研究』⁽ⁱⁱ⁾において、近年の発掘調査成果等を参考に新たに「戦国時代末の府内復元図」が提示された。現在はこれを基に部分的な修正が行われ現状にいたっている（図 5）。

確認調査と遺構の発見 以上の経過により推定されていた大友館の比定地において、平成 8 年（1996）度到大分駅周辺総合整備事業に伴う代替地が計画された。同事業は大分駅と周辺 J R 線の高架・立体交差化、大分駅周辺の幹線道路整備、大分駅操車場跡地等の活用を含む大分駅南土地区画整理事業などからなる大規模な都市計画事業であり、平成 7 年（1995）度に都市計画決定され、平成 8 年度から本格的に着手された。顕徳町 3 丁目

目で計画された代替地は、大分駅南土地区画整理事業地区の移転対象者を想定したものであり、17 戸分の宅地と公園 1 箇所を含む宅地造成が予定されるものであった。これ以前、起業地には大分市の誘致により昭和 36 年（1961）に工場（森産業）が建設され操業していたが、代替地事業に伴って平成 8 年に移転していた。

事業実施に先立つ平成 7 年度に、事業を主管する都市整備課駅南対策室（平成 8 年度から駅周辺総合整備課）から大分市教育委員会へ埋蔵文化財に関する照会があった。当時、文化財室が置かれていた文化振興課では、起業地が周知の埋蔵文化財包蔵地「中世大友城下町跡」（現中世大友府内町跡）であり、大友館の比定地であることから、事業実施前の平成 8 年度中に確認調査を行うことにした。

確認調査は、平成 8 年 10 月 14 日から 10 月 31 日まで行い、対象面積 5039m²に 5 箇所のトレンチを設定して計 550m²を調査した（図 6）。調査の結果、工場の基礎工事による攪乱があったものの全てのトレンチで遺構が検出され、15 世紀から 16 世紀にかけてのものと推定された。とりわけ第 1 トレンチでは、地表下 1.1 m～1.2 m において直径 1 m を超える大型の石が 3 点出土

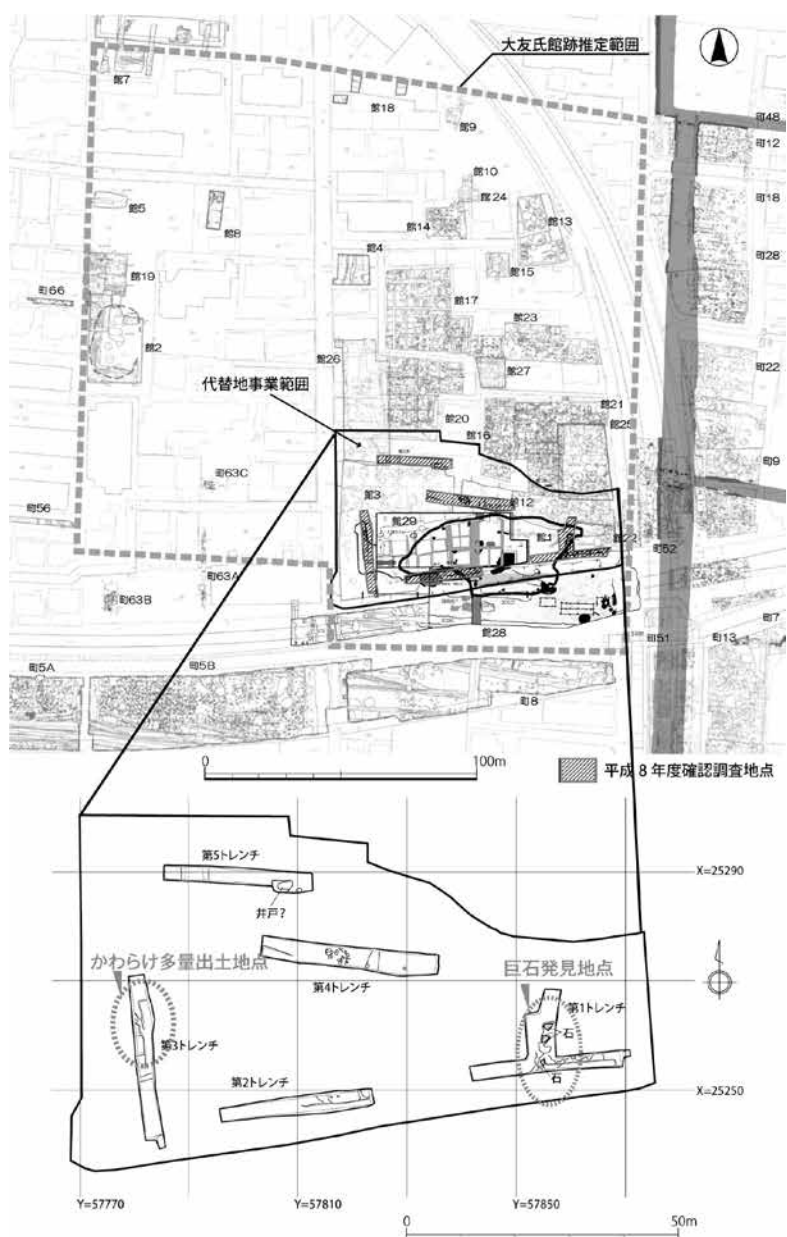


図 6 大友氏館跡範囲図（上）・平成 8 年度確認調査地点配置図（下）

(ii) 市役所職員有志による 10 年に及ぶ大友氏館跡研究成果をまとめた書籍。東京堂出版より大友館研究会編『大友館と府内の研究「大友家年中作法日記」を読む』の書名で 2017 年 8 月に刊行された。

した(図7)。これらは一直線上に並んで検出されたこと、非常に大型の石であることから特に注意を引いたものであったが、どのような遺構を構成するのかは不明であった。しかし、大友館の比定地における初めての考古学的



図7 確認調査で見つかった巨石(南から)

発掘調査において、これまでに例をみない遺構が発見されたことにより、大友館との関連を強く疑わせる結果を得た。なお、この巨石群は後の調査で庭園の東滝を構成する石材であることが判明する。

この結果を受けて、次年度以降に改めて起業地全体を対象とする広範囲の確認調査を実施することとなった。

一方、平成8年度と9年度には、「中世大友城下町跡」における発掘調査(中世大友府内町跡第1次～第3次調査)が大分駅周辺総合整備事業に伴う別の代替地予定地でも実施されていた。いずれも、上述の『大分市史』における現地比定作業により、「横小路町」に比定されていた地点での調査であったが、推定されていた位置で大規模な道路跡とそれに面する町家とみられる遺構が検出

された(図4)(第1次・2次調査)。また、第3次調査においては、島津侵攻時に火災に遭ったと推定される甕蔵跡が検出され(図8)、東南アジア産陶磁器を含む非常に多数の貿易陶磁器が出土して注目された(図9)。このような結果により、「府内古図」に基づく現地比定の正しさが改めて考古学的に証明されることになり、同様に現地比定された大友氏館跡推定地についても、その蓋然性の高さが評価されるようになってきた。



図8 中世大友府内町跡第3次調査で見つかった甕蔵跡(SX210)



図9 甕蔵跡(SX210)出土輸入陶磁器

これ以降、市・県が調査主体として当該地域で行われる発掘調査は、いずれも府内古図の現地比定を参照しながら実施されていく。

遺跡発見までの顕徳町 ここで視点を変えて、発掘対象となった顕徳町についてふれておきたい。

町の名前は、昭和39年(1964)4月の住居表示実施の際のものであるが、その起源は戦国時代にさかのぼる。天文22年(1553)、大友宗麟の許可を得て建立したキリスト教の教会(デウス堂)がこの地にあったとされ、「府内古図」(C類)にはこの教会を「キリシタンノコト タイウストウ ケントク寺」と記載されていた(図10)。「ケントク寺」は「天徳寺」「顕徳寺」とも記載されており、この名称が町名の起源となったと考えられている(竹内理三編1980)。

当町がこうした歴史的な背景を踏まえた呼称であることは重要である。現在は1～3丁目に分かれ、大分市中心市街地東部の住宅街となっており、2丁目は教会を含むキリスト教関連施設の想定地、3丁目が大友氏館跡の所在地である。なお、昭和30年版の『大分市史』には顕徳町から出土したとされる花クルスの刻まれた石造物が紹介されており、現在若宮八幡社境内に安置されている。

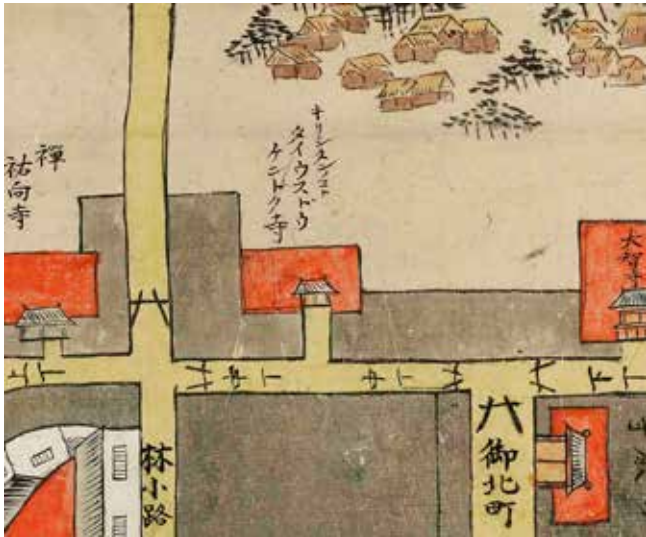


図10 府内古図C類に記された教会「ダイウスドウ」(大分市歴史資料館蔵)

顕徳町3丁目の変遷 当地を写した最も古い空中写真は、昭和23年(1948)1月に撮影されたものである(巻頭図版6)。写真をみると江戸時代の府内城下にかかる東新町(現在の金池町の一部)一帯と万寿寺周辺のみ宅地化し、長浜町から元町一帯の旧府内は一面田畑であった。この時点では明治時代の地割を明瞭に残しており、その一部は上述したように戦国時代にさかのぼるものである。写真中央には、のちに明らかとなる大友館の範囲を示す方



図11 1990年の顕徳町の様子(出典 国土地理院撮影の空中写真(平成2年4月撮影))

形の地割を確認することができる。

江戸時代以来大きな変化が見られなかった当地に変化がみえるのは1950年代以降である。昭和26年(1951)、国道10号の整備事業が始まり、万寿橋の整備が開始、昭和30年頃には中世大友府内町跡南半部を貫くように国道10号が完成した。これにより顕徳町3丁目、すなわち大友館北東部を国道が横断することとなる(巻頭図版7)。この大友館東側から元町までを通る国道は、奇しくも当時里道として遺存していた戦国時代の南北道路を踏襲したものであった。なお、大友館南端の庭園南側に相当する地点は、すでに完成していた豊州線(現日豊本線)を東に延伸する形で、大正3年(1914)に佐伯線(現日豊本線)大分・幸崎間が開通した際に線路が敷設されていた。大正期と昭和中期のインフラ整備によって当地は国鉄(後にJR)と国道に接する場所となる。国道の整備に連動するかのよう顕徳町周辺の宅地化が急速に進み、1960年代に入ると顕徳町3丁目も宅地化が進む。昭和36年(1961)の写真をみると、大友館東側中央から宅地化が進んだことがうかがえる(巻頭図版7)。この場所は大友館の中心建物が設置された場所にあたり、戦国時代から周囲より高く整地された部分であった。この高まりはこの時期まで維持されていたようで、当時も水はけのよい良地を選定していたことがわかる。昭和36年は大友氏館跡南東部の広大な敷地に大分市が企業誘致した「森産業」が建設され、翌年から操業が始まった。1970年代には明治時代からの地割を一部に残しつつ急速に宅地化が進み、1990年代後半までの間に、マンション3棟、鉄筋アパート3棟が建設され、戸建て住宅と集合住宅が密集する町内で最も世帯数の多い場所となっていく(図11)。平成8年(1996)、大分駅南土地区画整理事業地区代替地事業に伴って森産業が移転し、広大な空き地が生まれた。以上の状

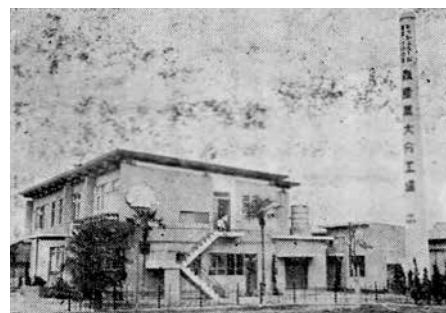


図12 建設当時の森産業(昭和36年ごろ)

況のなかで、平成8年10月、大友氏館跡推定地において初めての発掘調査が実施されることになる。

【インタビュー① 顕徳町の風景】



図13 田北さん(左)、藤田さん(右)

ふじたけんじ
藤田賢治さん 昭和25年(1950)生まれ

たきたせいじ
田北清治さん 昭和39年(1964)生まれ

【紹介】 お二人は、顕徳町3丁目(大友氏館跡の内)に元々お住まいであり、大友氏遺跡史跡ボランティアガイドの第1期生(藤田さん)、第3期生(田北さん)として大友氏遺跡や大友氏のPRを行っています。ガイドとして活動を行う中で、偶然にも大友氏館跡北西部に建てられた住宅の一角のお隣同士だったことを知ったそうです。お二人に遺跡が発見される前の顕徳町がどんな町だったのかというお話を伺いました。

●本日は、いつから顕徳町にお住まいだったのか、遺跡が発見される前の顕徳町界隈の様子をお聞きしながら、かつてお住まいだったこの場所を今後どうしていきたいか、どうあってほしいかについてもお聞きしたいと思います。

●いつから顕徳町3丁目にお住まいだったのでしょうか？

藤田さん：中学生の頃から。1963年頃は顕徳町3丁目に家を建設中で、1964年1月ごろに引っ越してきた。

田北さん：1964年に生まれたが、その頃から家がこの場所にあった。おそらく藤田さんより若干早くに引っ越してきたと思う。空中写真(巻頭図版7)を見るとまだ家がないので、1961年以降で藤田さんが引っ越してこられる1964年以前になると思う。もともと祖父の土地があり、そこに家を建てて住んでいた。

●1970年に撮影された空中写真には顕徳町3丁目全面に家が建て込んでいるのでおそらく大友館西側の最初期に家を建てられた方になると思います。

●顕徳町3丁目はどんな場所だったのでしょうか？どんな記憶があるか教えてください。

藤田さん：引っ越してきた当時は、写真(巻頭図版7)

にあるように、まだ田んぼが多かった。家の北側にはまだ住友化学の社宅(住友化学大分アパート)は無く、広い空き地だった。

●お二人は小学校、中学校はどちらになるのでしょうか？

藤田・田北さん：金池小学校で上野ヶ丘中学校。

藤田さん：父が昭和32年4月2日から顕徳町2丁目目で商売をはじめた。その前は西大分のかんたん(生石港町の一部)にいて、小学校1年生のときに引っ越して金池小学校に入学した。その後、中学生になって顕徳町3丁目目に移ることになる。昭和30年代の顕徳町2丁目周辺も当時田んぼだらけだった。この頃、2丁目目にあった「デウス堂趾」の木の看板があったのを覚えている。この看板の前には桑野製材場があった。工場の前が広く、よく野球をしていた。また、近くに銭湯「デウス温泉」があった。いまはアパートになっている。デウス堂趾看板の北西側には副知事官舎があり、木の実をとるために木登りをして怒られたが、とても美味しい梨をもらった記憶がある。

●金池小学校までの通学路はどのような道だったのでしょうか？

田北さん：自宅から、デウス堂を横目に通ってロケット印刷という印刷屋さんを通って大分県立盲学校の方に歩いていった。これが最短距離だった。

藤田さん：私も同じ。

藤田さん：角の副知事官舎を通って小学校に行った。途中にある盲学校前の道路左側に深い側溝がありナマズやフナ、メダカがいた。当時の金池小学校前は木も多くセミを取ったりしていた。学校の東側には文房具屋(下川



図14 昭和50年(1975)の大友氏館跡周辺の様子(出典：国土地理院撮影の空中写真)

文房具)があり、駄菓子も扱っていたので、子供がくじを引いたりしてよく集まっていた。

●お二人のお宅はどのような位置関係になるのでしょうか？

藤田さん：茶色い屋根が私の家で、その南隣が田北さんのお宅。間にあるトタン屋根の建物は父が運営する製麺工場があった(図15)。

●ご自宅周辺の風景を教えてください。

田北さん：当時自宅の南側は空き地で、その空き地の東側には大崎アパートがあった。その北側に借家が6軒あり同級生が何人か住んでいた。すぐ近所には住友化学の社宅もあり、転勤族もいて人の出入りの多い場所だったように思う。また、自宅周辺は敷地の大きな戸建ての住宅も数軒あった。

藤田さん：自宅が製麺所だったので近隣のお宅には年越しそばを届けていた。製品は学校やお店に出していて、注文が多いときは朝早くから作業をしていた。機械の燃料はノコズを使っていて、田北さんには煙などで迷惑をかけていたのではと思う。

田北さん：当時、製材所のようないい匂いがしていた記憶がある。まったく嫌いな匂いではなく、薪をくべてお風呂を沸かしているようないい匂いがしていた。

子どもの頃の記憶だが、当時の自宅周辺はすごくいい場所だった。土地に古くから住んでいる人もいて、豪邸もあった。

●大友氏館跡の中央を走っている市道顕徳9号線沿い(図14)はどんな様子だったのでしょうか？

田北さん：しいたけ工場の森産業があり、この対面(西隣)に自動車の整備工場があった(図14)。しゃれた車かとまっていて、子ども心にわくわくした記憶がある。

●当時はJR日豊本線が高架ではなかったもので、市道の先は突き当りで線路になっていましたよね。

藤田さん：森産業の工場の2階の道場で剣道を教えていて息子が通っていた。

田北さん：私も一時通っていた。しいたけの種駒の匂いのする場所でやっていた。2階に道場があったと思う。

●当時の顕徳町3丁目の遊び場はどこだったのでしょうか？

藤田さん：住宅ばかりだったのであまり遊ぶ場所はなかった。ただ、近くに大分市立金池保育園があったので

子供が通っていた。

田北さん：3丁目周辺には学校の先生や議員さんの自宅もあり、大分市内の中心部で金池小学校、上野ヶ丘中学校、上野丘高校に近いという立地もあり、いろいろな人が住んでいた。私にとって町のど真ん中という感じだった。

●ここまでのお話はご自宅があった3丁目の西側(大友氏館跡西側)のお話でしたが、東側の景色の記憶は何かありますか？

田北さん：住宅地を縫ってくねくねした細い道があった。当時はすごく雑居的なイメージ。西側のように一つの家をぼんと建てるのではなく、雰囲気が違っていった。

藤田さん：東側は朝来野学園(学校法人朝来野学園)や安部佛具店があったり、橋本食料品店や長昌ビルでは酒屋をやっていた。商店も多かった。

そのほか、顕徳町3丁目にはのちに高橋病院(のちに古沢病院)や膳所病院もあった。その他、仲田医院など病院も多かった。

●今は少ないですが、当時は食べ物屋さんもあったので



図15 (上) 顕徳町3丁目にあった藤田さん自宅前の風景(藤田賢治氏提供)。平成初期に撮影か/(下)現在の風景 令和3年12月

しょうか？

田北さん：実家は出前が多かったので、近くの食堂から出前を取っていた。本土寺前の角には「さこ食堂」があったが、3丁目北側の雑居ビル事務所内にも「みつや食堂」があった。当時は食べに行くというより出前を取るのが中心だった記憶がある。

藤田さん：受験勉強中の夜食などに「さこ食堂」から出前を取っていた。

田北さん：3丁目には2軒食堂があり、2丁目には「いこい」という食堂があり今はキッチン丸山になっている。長浜神社手前にもだるま食堂があった。当時小さな食堂がたくさんあった。

●3丁目はいつまでお住まいだったのでしょうか？

藤田さん：自宅の敷地でのマンション建設の話があり、その際に引っ越した。昭和62年(1987)頃だと思う。

田北さん：実家が移転した当時は、大学生で福岡市にいたので、実家にはいなかった。おそらくマンション建設(註1)にともなって引っ越したと思う。

●平成8年(1996)に森産業跡地で初めての遺跡調査が行われますが、その頃にはご自宅はここにはなかったということですね。

●では遺跡のことはいつ知りましたか？

田北さん：全然知らなかった。令和元年5月の市報で、ボランティアガイド3期生の募集を目にしたときに、かつて住んでいた場所が活動場所ということで、私がやらなければならないと思ったが、当時は大友氏遺跡の詳しいことも知らなかった。自分が大友家家臣の田北氏に関連するというルーツも知らなかった。

藤田さん：記憶が曖昧だが、NPO法人大友氏顕彰会に入る前後に知ったと思うが、詳しくは史跡ガイドとして研修を受けるまで知らなかった。田北さんとは、史跡ガイドとしてお話を聞く中で近所同士だったことを知ったぐらい。

●お二人が、25年ほどの時間を顕徳町3丁目でも過ごされ、町のど真ん中の住宅地で、大変住みよい場所だったことが今回お話を聞いてよくわかりました。その後、この場所で大友氏館跡が発見され、平成13年に国指定史跡となることで、翌年から土地の公有化が始まります。

住み慣れた場所のコミュニティに大きな影響があり、2006年秋には、当時お住まいだった住民の方による移転反対看板が上がる時期もありました(詳細は45頁参照)。それぐらいこの場所が住みよかったというのが今日のお話を聞いてよくわかりました。

●ここで、大友氏遺跡に対する思いを教えてください。

田北さん：この場所は、私が高校を卒業するまでいた場所であり、どこに移転してもここが「ふるさと」だと思っている。今ここには家はないが、「ここに帰ってこい」「家はなくてもここですることがある」という使命感を感じている。その使命感からここでガイドをしていると思っている。上手にしゃべれないし、歴史にも詳しくないけどこの場所への気持ちは強い。

藤田さん：もともと歴史は詳しくなかった。以前病気を休養している際に、図書館で大分古国府歴史文化研究会の『豊後大友氏400年の風景』という本をよんで感銘をうけて郷土に立派な人がいたことを知った。

そのころ、大友氏遺跡史跡ボランティアガイドの募集があり、チャレンジした。周りのガイドさんはとても詳しい方ばかりだったが、ひと月図書館にいて猛烈に勉強した。まだまだだけど、大友氏の歴史を学ぶことがどんどん面白くなった。そして大友氏顕彰会に入って、大友氏ゆかりのいろんな場所について、今に至る。

●最後になりますが、今後の抱負としてここで何をしたいかを教えてください。

藤田さん：20数年住んでいた場所として愛着がある。もっと遺跡としての認知度を上げたい。また、大友氏館跡西側に予定している歴史文化観光拠点施設(巻頭図版16頁)用地を早く確保し、西側からバスが出入りできるようにするなど入口を分かりやすくしてほしい。先日の宗麟公まつり・大友氏遺跡フェスタ(令和3年10月30・31日に開催した)でお客さんをガイドした際、この場所を初めて知ったという人がたくさんいた。ここがどんな場所で何をしているか知らなかった。まだまだ市民に浸透していないと思う。将来の歴史公園に向けて、市民にアピールして認知度を上げてほしい。我々もガイドとして使命感をもってやっていくが、根底として「大友氏遺跡がここにある」ということを広く知ってもらい、

そうすることで、我々史跡ガイドの活動の幅も広がると思う。

田北さん：今後の調査のなかで、私の家があった場所の下を掘ることがあれば立ち会いたい。できれば一緒に掘りたい。当時、家の北側に倉庫があって鶏を飼っていた場所があったが、その脇のじめっとしたところを自分で掘っていたことがある。父は国鉄の関係でガラを捨てた場所だと言っていたが、急須の破片などがでてきたのを記憶している。一人遊びで掘ったりすることは好きだった。あの下に何があるんだろう？元々祖父がもっていた土地であるが、この土地の下に何があるのか。大友氏館跡であることはわかっているが、実際に何が埋まっているのか。それに興味がある。

今後に向けては、ここが大友氏遺跡だということを時間をかけずにPRする方法があればすぐにでもやっていきたい。ボランティアの活動も行うが、南蛮 BVNGO 交流館で予定されているイベント「大友館のおもてなし 2022 大おもて会」にむけて、大友氏に関する劇を上演する予定であり、仲間と練習を始める。劇では、ここが館であったことを伝えられるように工夫したい。私自身、歴史はそんなに詳しくないが、「伝える」というところに焦点を当てたい。「今ここに戦国時代当時の建物は無いけれど実際はこうだった」ということ、大友宗麟とは何ぞやという部分ではなく、この場所の話をしたい。将来的な整備は大分市にお願いしたいが、ボランティアガイドとしてできることは伝えること。そして伝えたことをまた伝えてもらう。これを大切にしたい。

藤田さん：私もそこが大事と思う。

田北さん：先日の宗麟公まつり・大友氏遺跡フェスタでもステージで大友家に関する舞台を上演したが、一般の方からいろんな反響をもらった。引き続きがんばっていきたい。

●大変良い言葉をいただきました。まだお話し足りない所もあるかと思いますが、本日はありがとうございました。引き続きよろしくお願ひ致します。

(聞き手 長直信 令和3年12月12日インタビュー)

註1) マンション建設に伴い平成10年(1998)に発掘調査が行われた。大友氏館跡の一部が発見されたため、建設は中止となりその後、市が史跡として土地を購入することとなる。

余録 「デウス堂跡」看板の記憶

本編からややそれるが、「デウス堂址」の看板について以下のようなやりとりがあった。デウス堂にまつわる看板の貴重な証言であり別途収録しておきたい。

●「デウス堂」の看板を覚えていますか？

田北さん：あったのは覚えている。

藤田さん：覚えている。金池小学校6年の担任だった加来立雄先生が歌が得意で、金池校区の各方面の歌を自作していた。当時「顕徳寺町の歌」を作っていてよく覚えている。「♪ ああー かぎりゆたかなー 顕徳寺町 ここにそびゆる学び舎はー 今に伝わるデウス堂 デウス堂 ♪」という歌だった。

デウス堂の看板は図16のものではなく、当時記憶しているのは50cmか60cm四方の木の柱で真四角の看板で「デウス堂跡」と書いてあったもの。これはボロボロになっていて、周囲に聞いてもみな同様の記憶がある。

このお話について、後日『大分今昔』(昭和37年11月～38年12月末まで大分合同新聞に連載されたもの。1962年～1963年の大分の様子がわかる。)に記載された「デウス堂の回想」の項目を確認した。ここでは、「顕徳寺町の小野建アパート北側の道路わきに「デウス堂跡」の大きな標識が倒れそうな姿勢で立っている」とある。さらに「戦後いち早く郷土史家からその位置の意見をきいて上田市長が建てたもので、豊後キリシタン史跡をあらわす唯一のものだ。」とある。昭和37年頃の様子であり藤田さんの記憶にある看板はこちらのものと考えられる。なお、「最初はたしか東新町の本通りを、まっすぐに上野に行く途中の、踏み切り少し手前に建ててあったように思うのだが、いろいろと調査の末、現在位置付近が、たしかにそれと決定したものである。」(渡辺克己1964年『大分今昔』大分合同新聞社 235頁)とも記載されている。余談ではあるが、ここにある「当初の場所」は平成14年にキリシタンの墓地と考えられる遺跡が発見された場所に相当する。記録によれば墓地に隣接して教会や病院があったとされることから、この付近がデウス堂の有力地点である。



図16 昭和32年に設置された「デウス堂址」木製看板(左)・昭和53年に設置された石製の碑(右) 昭和55年頃撮影

2. 大友氏館跡の「発見」

平成8年（1996）の確認調査を踏まえて、遺跡の性格を具体的に解明することを目的に、大友館推定地において本格的な調査が開始された。

大友氏館跡第1次調査 調査は上記の代替地予定地5039㎡のうち東半部を中心とする範囲を対象として面的に実施することとし、平成10年7月21日に表土剥ぎに着手した。8月上旬まで行った遺構検出作業の結果、東西30m以上にわたって南側に向かって落ち込む非常に大規模な遺構が検出された（巻頭図版18・19）。検出位置が館比定地の南端に沿ってほぼ東西に延びていたことから、館の南を画す堀である可能性がまず考えられた。しかし、一部にトレンチを入れて確認したところ、検出面からの深度は最大2m程度と推定され、反面遺構の掘り込みは緩やかであったこと、また南側の立ち上がりも調査区内で検出されず、南北幅が非常に広い遺構であると推定されたこと、さらに調査区東部でプランが収束しており、東に延びないとみられることなどから、堀とは考えにくいことが判明した。

さらに平成8年度の確認調査で出土したものに類する非常に大型の石が遺構底部付近に多数存在することも確認された（巻頭図版17・図17）。このため、遺構の性格を確認するため、遺構全体を面的に掘り下げることにして調査を進めた（巻頭図版20）。10月18日には台風10号のもたらした豪雨により遺跡が冠水する事態を経ながらも（図18）、結果10月上旬までには①遺構の底部付近に大型の石が多数認められ、遺構の最深部を囲むように連続的に並べられていること、②遺構最深部には滞水の痕跡があり、池とみられること、③調査区の東部



図17 庭園池跡部分の掘削状況（平成10年10月）



図18 台風10号により冠水した調査現場（平成10年10月18日）

付近に特に巨石が集中すること、④遺構埋土には最古段階と考えられる唐津系陶器が含まれていることが明らかになってきた。

このような結果を受け、国立歴史民俗博物館の小野正敏氏を招聘して調査指導を依頼した結果、戦国大名居館に伴う大規模な庭園遺構であると評価された。あわせて、庭園史研究を専門とする京都芸術短期大学（当時）の仲隆裕氏を招聘し、庭園遺構であることを改めて確認した。

大友氏館跡第2次調査 こうした動きとは別に、平成9年10月に大友氏館跡比定地の西端付近で大規模な集合住宅建設が計画され、10月29日に確認調査を行った結果、土塁の可能性が考えられる遺構が認められた。開発者との協議を進めた結果、翌年度に本調査を実施することになり、平成10年11月4日から調査に着手した。その結果、16世紀後半の大規模な整地層や掘込地業跡、L字状に折れ曲がる土塁と推定される遺構や井戸跡等が検出された（巻頭図版22）。土塁遺構は16世紀前半～中頃に比定され、その後削平・掘削された上、大規模な整地層で覆われていると判断された。この調査結果から、大友氏館跡西側外郭線に関連する遺構の可能性が高いと推定された⁽ⁱⁱⁱ⁾。

(iii) 平成18年度に第2次調査と同地点にて実施された第19次調査において、16世紀前半の土塁とされていたものは、大規模な区画溝であることがわかり見解を修正した（高島2007）。その後の調査において16世紀前半段階の大友氏館跡北西部には、巨大な堀で区画された約50m四方の空間があることがわかっている。

【インタビュー② 遺跡発見当時のこと】

杉崎重臣さん（昭和6年（1931）生まれ）

紹介 1996年、大友館推定の発掘調査を担当した杉崎重臣さんに遺跡発見当時のことを聞いてみました。

杉崎さんは教員として市内の小中学校で教鞭をとられていました。昭和50年（1975）、大分市教育委員会社会教育課で本市初の文化財担当として文化財に関わる業務に従事され、後の文化財課の黎明期を支えた方です。



図19 杉崎さん

●昭和50年代の業務の状況を教えてください。

杉崎さん：大分市の文化財行政は、私と当時採用されたばかりの讃岐和夫さん（技師）、由布和久さん（事務職）の3名から始まった。森岡小学校の校舎建設に伴う守岡遺跡

（弥生時代から古墳時代、戦国時代の重要な遺跡）の調査や、大東中学校の新築移転に伴う多武尾遺跡（弥生時代の環濠集落遺跡。小銅鐸などの希少な青銅器が発見された。現在横尾遺跡と名称が変わっている）の調査など、大規模な発掘調査を担当した。昭和53年には、市内の文化財を写真図版で紹介した『大分市の文化財』を刊行、大山寺の木造普賢延命菩薩坐像の重要文化財指定



図20 『大分市の文化財』

にも携わった。また、大分県地方史研究会が発行する『大分県地方史』にも大分市内の遺跡に関する論文を投稿した。昭和56年3月まで文化財業務に従事し、その後学校現場へ戻った。教員の退職後、平成7年（1995）から平



図21 インタビュー風景（左 高島豊、中 杉崎氏、右 坪根伸也）

成14年（2002）まで文化財課の嘱託職員として発掘調査に従事した。

●大友氏館跡との関わりについて教えてください。

杉崎さん：平成8年、（当時65歳）に大友館推定地の確認調査を担当することとなり、10月より調査を開始した。元々森産業の工場があった広大な土地だった。

●発掘調査当時のことを教えてください

杉崎さん：いくつかのトレンチ（遺跡の有無を確認するために設置した試掘穴）を重機で掘り下げ、その後、作業員さんと遺跡の面を掘り下げていくと、大きな石が複数見つかった。石が見つかった時は寺院の礎石かなと思った。当時は「府内古図」の信憑性にまだ疑問がある時代であり、ここが大友館であること自体も考えていなかった。

その後、西側のトレンチ（図6第3トレンチ）でたくさんのかわれけがまとまって見つかった（図22）。当時、全国の武家の館跡からは多量のかわれけが見つかることを知っていたので、このかわれけの発見からここが「大友館」ではないかと思うに至った。



図22 出土したかわれけ

確認調査は15日程で終了し、その後、中世大友府内町跡の初めての調査（中世大友府内町跡第1次調査）が始まったことからそこに行くことになった。

当時発掘作業員さんは、大友氏館跡に隣接する錦町の住民から募集した。大友氏館跡の調査も中世大友府内町跡の調査も同じメンバーで調査した。

●大友氏館跡の未来にむけて一言お願いします。

杉崎さん：発掘当時、判断を間違えれば、遺跡は壊され開発されていたかもしれない。大友館がもっと全国的に知られるものになってほしい。みんなの力で引き続き守ってほしい。

（聞き手：坪根伸也・高島豊・長直信 令和3年11月22日インタビュー）

3. 史跡指定までのみちのり

ほぼ同時期に並行して進められた第1次・第2次調査では、双方の地点において共に大友氏館跡に関連する可能性が高いと評価できる遺構が検出されることとなった。これらの調査結果から、大友館推定地が実際に大友氏の館跡である可能性が極めて高いと判断された。中世大友府内町跡の調査成果も踏まえると、地中より出土する遺構・遺物は日本史上に留まらず、世界史的広がりさえ有しており、大友氏とその中心的な遺跡の歴史的な重要性が深まった。

国史跡指定に向けて これを受け、平成10年11月以降、本市教育委員会は大友氏館跡の今後の取り扱いについて、文化庁及び大分県教育委員会と協議を重ね、平成11年(1999)3月に国史跡指定に向けての方向性が固まった。具体的には①「府内古図」を根拠とした大友氏館跡二町(約200m)四方について、文化庁として「全体指定」を行う方針とする。②その第1段階として2000年度に庭園跡(JR大分駅南区画整理事業代替用地)(約5,000㎡)及び民間マンション用地(約2,000㎡)の指定を行うという内容である。なお、協議を進める中で、大友氏館跡内での民間マンション建設計画に伴う調査が始まる(第2次調査)。館の土塁跡とみられる遺構も出てきたことから、館跡の保存が緊急性の高い問題として浮上した。文化庁では①数少ない中世の守護館跡としての遺跡の重要性、②開発に伴う緊急性の2点から正式指定を前に史跡を指定する方針を明らかにした。平成11年11月28日には大友氏館跡ではじめての現地説明会が開催され、700人もの人々が遺跡に訪れ、庭園跡を目にした。

平成11年度からは国庫補助事業による大友氏館跡範囲確認調査を実施することとなり、庭園遺構や館西端部の土塁周辺の広がりを確認する調査(3～5次調査)を実施、平成12年度は館跡の中央部および北限施設等の確認調査(6～9次調査)を行い、大友氏館跡の具体的な様相が明らかとなっていく。平成11年～13年度までの史跡指定前後の動向と平成16年頃までの事業経過については玉永光洋氏の報告に詳しく、以下はこれを参考に記載した(玉永2005)。

大友遺跡検討委員会の設置 大友氏館跡の保存整備及び大友氏館跡を中核としたまちづくりに関し、総合的に検討を行うため、平成11年に市長の諮問機関として大友遺跡検討委員会が設置された。補佐する庁内の内部プロジェクト組織(11課14名)も併せて設けられた。委員会のメンバーは、大分市政策アドバイザー2名、学識経験者3名、観光・街づくり代表4名、地元代表2名、行政機関2名の計13名で構成され、事務局を教育総務部生涯学習課が担当することとなった。委員会の概要は以下のとおり。

①都市計画(まちづくり)上における中世大友氏の遺跡の今後の取り扱いについて、総合的に検討し十分な調整を図ることを目的とした検討委員会を設ける。②この検討機関は、市役所内部のプロジェクト及び専門家を含めた市民各層からなる委員をもって構成する。③この委員会は、日本の歴史にとってかけがえのない文化遺産を、大分市の大切な資源として活用していくための方向性を示し、市長に意見を述べるものである。

3カ年、計6回の審議(山口大内氏館などの視察と市民団体との意見交換会を含む)の結果、都市に生活する市民の価値観も多様化している中、地域の歴史遺産に触れ、感じる事ができる「場」としての空間を、街づくりに反映させることがきわめて重要であり、歴史遺産の情報発信を行い、市民の十分な理解とその活用が大切であるとの総意を得た。そこから、歴史を活かしたまちづくりとして「地域の歴史と文化を知り、愛着と誇りを育む資産づくり」という目標を掲げ、その達成のため行政機能と民間の活力を最大限活かし、それぞれが連携し、効率的・効果的な施策としていく3つの活用方針が提言され、各活用方針に沿った短・中・長期計画と具体的な検討メニューが示された

(図23)(大友遺跡検討委員会2002)。

意向調査 遺跡保護の方向性を探るため、関係住民を対象とした意識調査を平成11年度に実施した。全体



図23 「大友遺跡検討委員会報告書」(平成14年3月刊行)

として史跡指定についてはほぼ半数近くの人（43.2%、この内地権者に限定すると46.0%）が「同意する」としており、「反対する」人は16.2%（同18.4%）と少ないものの、残りの人は「わからない」（35.1%、同33.3%）と答えていることから、指定の意義、指定後の規制等について十分な説明と理解を得る必要性が浮かび上がった。

表1 大友氏館跡の発見から史跡指定までのみちのり

年	月	内容
平成10年	7月	館1次調査開始（調査担当 高島豊技師）
	9月	庭園状遺構の確認
	11月	館2次調査開始[民間開発]（調査担当 塩地潤一技師） 大友氏館跡、西側の状況確認
	11月4日	小野正敏氏現地視察
平成11年	11月28日	大友氏館跡第1次・第2次調査現地説明会(700人会場)
	3月	文化庁より国史跡指定に向けての方向性が打ち出される
	5月2日	大友氏館跡第1次・第2次調査現地説明会(1000人会場)
	8月15日	市報おおいの特集号「大友館跡と宗麟」全配布
	8月	第1回大友遺跡検討委員会開催
	9月	様々な団体より遺跡の保存要望出される
	11月	館3次調査開始（調査担当 河野史郎技師） 庭園が3期に分かれること。庭園西半の様子確認
	12月	館4次調査開始（調査担当 池邊千太郎技師） 中心建物想定地周辺の調査
平成12年	1月	館5次調査開始（調査担当 池邊千太郎技師） 館西側の建物確認
	6月	「中世大友遺跡」にかかる地元説明会の開催 (大分市立金池保育所ホール)
	10月	大友館跡第6・7次調査 現地説明会 中心建物の一部と北外部確認
平成13年	2月	地権者の同意をえた大友氏館跡内8物件(約10,000㎡)について、文部科学大臣に史跡指定を具申
	8月13日	大友氏館跡が国指定史跡の告示を受ける
平成14年	8月25日 ～9月2日	“大友週間”各種記念事業を実施
	3月	『大友遺跡検討委員会報告書－大友遺跡群活用まちづくり検討報告－』提出

なお、条件が整えば協力すると答えた人では、適切な金銭補償を求める人が最も多く、その次に代替地や生活環境が変わらないことなどをあげた人が多かった。

市報おおい特集号 文化庁から大友氏館跡の国史跡指定の方向性が示されたことにより、本市は、①館跡の範囲

確認調査の実施。②関係住民を対象とした意向調査の実施。③大友遺跡検討委員会の設置等を行う旨のお知らせを掲載した市報特別号を平成11年8月15日に発行した(図24)。あわせて、大友氏館跡や大友宗麟について広く理解していただくため、マンガ「英傑豊後王大友宗麟」や館跡などの発掘調査成果を紹介した。なお、このマンガは英語版も製作した。

これに先立つ平成9年(1997)3月15日には中世大友府内町跡の発掘調査速報として「文化財だより」第6号1996年度号を刊行。翌10年にも「文化財だより」第7号を、平成13年にも史跡指定を控えた大友氏館跡を中心に「中世大友再発見」と題した特集号(図25)を市報と共に市内全戸に配布し、姿を現した大友氏の遺跡に関する幅広い周知を行った。以後、継続的にさまざまな媒体を用いながら現在にいたるまで、大友氏遺跡に関する情報や調査研究成果を適宜市民へ公開を行っている。



図24 市報おおい特集号「大友館跡と宗麟」(平成11年8月15日発行)



図25 文化財だより「特集 中世大友再発見」(平成13年7月15日発行)

4. 史跡指定と記念事業

平成13年(2001)2月、地権者の同意を得た8物件(約10,000㎡)について、文部科学大臣に史跡指定を具申した後、5月16日の文化審議会の答申を経て、8月13日に大友氏館跡が国指定史跡の告示を受ける。これにより大友氏館跡約40,000㎡の内、およそ四分の一の面積が指定されることとなった。

指定理由 「大分市街地の南東部、大分川河口部付近の顕徳町一帯は、戦国時代に北部九州一円に覇を唱えた大友氏の大友氏が守護所を置いた地で、豊後府中・府内と呼ばれた。大友氏は、相模国を本貫地とする鎌倉御家人の後裔で、16世紀の中頃から後半にかけて最盛期を迎えた。第21代の宗麟はキリシタン大名として著名で、南蛮貿易に積極的に参画し、北部九州6か国を支配したが、天正14年から15年(1586～1587)に島津氏の侵攻を受け、22代の義統は朝鮮在陣中の戦線離脱を理由に文禄2年(1593)に豊臣秀吉によって除封された。

戦国時代の大友氏城下町を描いた近世成立の「府内古図」と明治期の地籍図、遺称地名などとの照合によって推定復元された「戦国時代の府内復原想定図」(『大分市史』)によれば、豊後府内の範囲は東西約0.7km、南北約2.1kmの壮大な都市域を有する。その中心となる大友氏館跡は、北東部が南側に歪み、南東部が南側に張り出す、一辺約200mの不整形を呈すると推定される。大分市が実施する区画整理事業に伴う移転代替地として、大友氏館跡比定地の一部が予定されたために、大分市教育委員会が平成10・11年度に発掘調査を実施したところ、南東部において東西約83m、南北16m以上の長靴状の平面形を呈する、巨岩の景石を配した池をもつ庭園遺構を検出した。また、西側外郭推定線付近で計画されたマンション建設に伴う発掘調査では、16世紀前半の土塁遺構、後半の大規模な整地層、掘立柱建物跡などが検出された。北辺西隅部の発掘調査では6本の溝跡が検出され、溝跡は2本が一对となる築地跡と推定され、順次北側へ拡張されている。中心部の発掘調査では、15世紀から16世紀の遺物を含む1m以上の整地層と、径1m強の根固め石を詰めた土坑が7基検出された。2回から3回の切り合いが認められ、大型の建物跡の存在が推定される。

出土遺物の特徴は、①大量の土師器皿、②茶器、③館跡遺構の年代よりも古い中国陶磁器、④華南・東南アジア陶磁器の出土などがあげられる。①は出土遺物の大半を占め、様々な儀礼、饗宴で使用されたハレの器である。②③は大友氏の茶の湯文化と家格の高さを示す。④は南蛮貿易によってもたらされた器物である。フロイスの『日本史』には、天正14年末から15年の島津氏の侵攻によって、府内が焼亡壊滅したと記されている。庭園遺構からの出土陶磁器のかなりのものには、火熱を受けた痕跡が認められ、館が焼き払われ庭園も破壊されたと推定される。

大友氏館跡は北部九州、西国の戦国時代史の重要な中心地の一つであり、方二町の室町幕府の規範を遵守する守護館の典型を示すものである。よって史跡に指定し、保護を図ろうとするものである。」(『月刊文化財』(平成13年7月号)より)

この史跡指定を記念して、8月25日から9月2日の一週間を“大友週間”と銘打って各種記念事業を実施した。以下その概要を記す。

中世大友再発見フォーラム 大友氏館跡の国史跡指定を記念し、フォーラム2001「南蛮都市府内再発見」を開催した。新たな調査成果と文化財を活用したまちづくりについて広く市民に公開し、大友氏館跡を全国に発信するとともに、事業の推進に理解を得ることを目的とした。
内容 大分市・大分市教育委員会・中世都市研究会の主催とし、大分県教育委員会・大分県立先哲史料館の共催で実施。期日は平成13年9月1日(土)～2日(日)。



図26 中世大友再発見フォーラムPR活動(平成13年8月19日)

①中世大友再発見フォーラム

9月1日(土)

遺跡現地説明会(午前)

記念講演(午後)

- ・石井 進(東京大学名誉教授)「南蛮貿易都市の軌跡」
 - ・小野正敏(国立歴史民俗博物館)「戦国時代の館その景観と機能」
- 公開シンポジウム(午後)「大友復活・地域活性・住民参加・街づくり」
- 【パネリスト】** 木下敬之助(大分市長)、長谷目源太(大分市市政アドバイザー)、石井進(東京大学名誉教授)、加藤允彦(文化庁記念物課)、高瀬忠重(山口県立大学教授)、松村紅実子(ふらんすこ代表)
- 【コーディネーター】** 姫野清高(大分市観光協会事業活動委員会委員長)

9月2日(日)

中世都市研究集会「南蛮都市・豊後府内—都市と交易—」

豊後府内についての4つの研究報告と、これに対するコメントが交わされる形で行われた。

- ・坂本喜弘(大分県教育委員会)「考古学から見た中世大友府内町の成立と構造」／コメント 玉井哲雄(千葉大学)
- ・鹿毛敏夫(大分県立先哲資料館)「文献・絵図からみた大友館と府内の町」／コメント 山村亜希(京都大学)
- ・高島豊(大分市教育委員会)「戦国時代豊後府内の貿易陶磁器」／コメント 森本朝子(福岡市教育委員会)
- ・大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館)「陶磁貿易からみた東南アジアと日本・豊後」／コメント 佐伯弘次(九州大学)
- ・その他 出土品の展示・資料集の作成・大友関連のビデオの上映

②「大友週間」行事(イベント)

- ・「大友河原市」、大分ウォーク「ビンゴで歩く南蛮都市府内」、夏休み特別連続講座、宗麟茶会など

③その他の行事

- ・特別展「大友府内—よみがえる中世国際都市—」

【場 所】 大分県立先哲史料館

【開催場所】 平成13年8月23日(木)～10月6日(土)

【主 催】 大分県教育委員会・大分県立先哲史料館

④よみがえる中世「府内と大友宗麟」新聞記事の連載(10

回)・期間8月20日～8月30日

- ・長谷目源太(検討委員会委員長)「まちづくりの期待 21世紀の記念事業に」、木村幾多郎(大分市歴史資料館)「いにしえ語る古図 観光資源へ期待高く」、塔鼻光司(大分市教委文化財課)「絵図通りの町

出土 信びょう性高める」、池邊千太郎(大分市教委文化財課)「大富豪の大友館 室町将軍に肩を並べる」、高島豊(大分市教委文化財課)「栄えた貿易都市 多くの輸入品出土」、鹿毛敏夫(大分県立先哲史料館)「にぎわった祇園会 山鉦巡行で最高潮に」、坂本嘉弘(大分県教委文化課)「碁盤目の町割り 京都の街並みを意識」、甲斐寿義(大分県教委文化課)「キリシタン遺物 南蛮都市として発展」、河野史郎(大分市教委文化財課)「上原館と高崎城 三層構造で防衛」、秦政博(大分市教委学校教育部長)「次々と進む発掘 屈指の歴史遺産に」

大友氏館跡の国史跡指定を記念した事業は、以上の企画のもとに行われた。大友週間行事の内、雨天のために高崎山登山は中止となり、柞原八幡宮宝物殿及び先哲史料館の見学に変更されたが、他の行事は予定人数を上回る盛況ぶりであった。とくに中世大友再発見フォーラム及び中世都市研究集会では約1,000人もの参加者が県内外から集い、豊後府内に対する関心の高さがうかがえた。また、公開シンポジウムでは、各パネリストによって有益な提言が数多く出された。

また、このフォーラムの機運を盛り上げ、各会場の賑わいを醸し出す仕掛けとして、スタッフが着用するハッピーとのぼり旗をつくった。ハッピーの色と模様は、豊後府内の貿易品の特徴である華南三彩壺(トラディスカント壺)をイメージし、背中に大友氏の家紋(杏葉紋)をあしらった。のぼり旗は、宗麟の洗礼名フランシスコを刻した印章をモチーフとして、当時ヨーロッパまでその名が知られたFunaiの文字を配した図柄とした(図27)。



図27 大友ハッピーとのぼり旗

中世大友再発見フォーラム公開シンポジウム要旨

現在も十分参考となる提言であり、当時交わされた会場の熱気の伝わる各氏の意見をまとめておく。

○大友氏館跡の国史跡指定の意義等について

(加藤允彦氏) 発掘調査で大友氏館跡の有様がわかってきて、数年を経ずして国史跡指定に進んだことは、異例な進み方である。それも大都市の中であって部分ではなく館跡全体を保護していく姿勢をはっきり打ち出す方向で進んだことは非常に大切なことであり、庭園を持つ大友氏館跡の整備は、大分の個性あるまちづくりの中で重要な空間となる。

(石井進氏) 大友氏は、鎌倉時代この豊後をはじめとして北部九州、中九州諸国の支配をゆだねられ、いわば正統的な家系を継いで大友宗麟にいくという、家系的に武士の中でも貴族的な家柄といえ、宗麟自身は文化人という色彩が非常に強く、ポルトガルと結びついてヨーロッパの文化を最初に輸入したのは宗麟と言える。大友氏館跡から初期ヨーロッパとの直接の文化交流のさまざまな遺物が出土する可能性が高く、これからの国際化の時代に東南アジアに開かれた門戸であると同時に、日本とヨーロッパ、西欧諸国との最初の文化の掛け橋となったという意味で大変大きな、他に類を見ない南蛮貿易都市「豊後府内」の特徴ではないか。

○大友氏館跡の保存整備・活用、まちづくりについて

(長谷目源太氏) 大友遺跡検討委員会も3年経過したことから今年度末までには、ひとつの総括をしなければいけない段階になっている。これまでの戦後の政治を中心に、あまりにも経済GNPのことだけを考えた何十年間であったと言われてもしかたがないが、これからの21世紀はそうではないものを中心に政治や市民の活動を目指すべきである。すなわち、大友の偉大な遺産をどのように大分市が活用していくかということであるが、抽象的な表現であるが、ロマンと郷土ナショナリズムだと思う。過去の歴史の中の誇れるもの、すばらしいものを現在に有効性をもたしていくことがロマン主義、今に生きるものたちの問題、それをどのように活かしていくかということが郷土ナショナリズムだと思う。つまり、大友の遺産を最大限生かしていくためにはどうあればいいのかということが行政の全市民的な課題である。10年、20年かかるかもしれないが、行政が中心となって大友の遺産を知恵と財力、いろいろなものを結集して取り組めば必ずできるはずであり、大分の都市像のトータル的なアイデンティティを大友の中にこそ求めていくべきで、求めていけるものであると考える。

タル的なアイデンティティを大友の中にこそ求めていくべきで、求めていけるものであると考える。

この事業は、歴史とか考古学を超えた大事業になる。しかしそうはいっても当面は、発掘事業の中で育児院、病院、コレジオといったキリシタン施設に明るい展望をもっていただきたい。

(石井進氏) ザビエルが訪れて以来、トルレス日本布教長は府内に長く滞在し、後任のカブラル日本布教長も府内・臼杵を日本布教の中心地とした。またイエズス会東インド巡察師ヴァリニャーノは日本人神父を養成するため、府内にコレジオ、臼杵に修練院を設立した。(1587年マカオ司教区から日本司教区は独立。府内は司教座都市となる。) このように宗麟の保護・協力もあって、豊後府内が日本教会全体の中心となり、宗教的な中心都市となる。そのような意味で豊後府内は、日本に2つとない重要な都市であった。豊後府内の地下から宗教施設(コレジオなど)が出てくれば、南蛮交易都市府内の位置付けが非常にはっきりとした形で目に見えてくる。こうした具体的なものが整ってくれば、国際化の時代にあって自分たちの生まれ育った故郷の話を堂々と自己主張できるよりどころとなる。

(高瀬忠重氏) 都市工学、都市デザインといった観点から見ると、近年都市に関する考え方が変わって来ている。従来の都市というのは、住む所、働く所、憩う所(レクリエーションをする所)、それらを結ぶ交通(巡る)、この4つが都市の機能であると定義され、それぞれの機能を向上させることが、都市の発展、向上につながるというのがこれまでの考え方であった。しかし、現在は、都市に生活する都市民の価値観も多様となってきており、都市の歴史を示す史跡や文化財に触れ、感じることで「場」としての空間を都市デザインに反映させることが、非常に重要な課題と考える。大友の町は、幸い古絵図が残り、現在の市街図の上に復元する作業を終えているということは、こうした意味でのデザインを描いていく次のステップに進めるという点では、大分市は山口市より進んだ段階にあると言える。

(加藤允彦氏) 大友をベースとした個性あるまちができれば多くの観光客が訪れる。どこにでもあるまちをつ

くったのでは多くは望めない。そのまちは、いろいろな歴史も含めた都市の空間、生活環境としての空間が形成され、文化財はそうした歴史的なものの発信の中心になるものではあるが、重要なことは、そこに住んでいる市民の方が、十分使いこなす（まち使い）ことが大事である。大分市の場合は、長い先を見据えてのまちづくりをしていかなければならないだろうし、その中心部分に大友の遺跡があって、館があるといった構造になることを期待する。それをつくりあげる主役は市民である。

(松村紅実子氏) ①庭園跡などの復元を行うとともに、大友府内町のエリアを教育文化ゾーンに設定して、文化発信センターとしての資料館をつくる。②春や秋にはかつて栄えた「府内の市」を再現した大友河原市を大分の一大観光イベントに育てる。③常設の観光ボランティアガイドの部屋をつくり、ガイドの育成をする。④かつて府内には学院があったので、大友氏の歴史を学校教育の中に取り入れて、郷土の歴史を学習できるきっかけをつくる。⑤上原館や高崎城を国史跡にして、津久見や臼杵など大友ゆかりの地を結んだ観光ルートをつくる。⑥一般の人が、気軽に参加できるような大きな組織を大友遺跡検討委員会の上か下につくり、各種活動を行い、大友を広めていく。

大友河原市 大友再発見フォーラムに連動して「大友河原市」が県庁横の遊歩公園で行われた。(図28) かつて栄えた「府内の市」を再現して大分の一大観光イベントに育てたいとする南蛮文化と大友宗麟を学ぶ会「ふらんしすこ」の松村紅実子代表の仕掛けであった。のぼり旗がたなびく公園に、フリーマーケットの店が並んださまは、当時の市立での賑わいを彷彿とさせるものであった。ペットボトルで作った灯籠が夕闇迫るころ点灯され、幻



図28 大友河原市風景(平成13年8月25日)

想的な風情も演出された。(以上 玉永2005を引用一部追記・改変)

5. 発掘調査の進展と大友氏遺跡へ

進む発掘調査 史跡指定以後も、土地の公有化が行われた場所から順次発掘調査を進めてきた。大友氏館跡中心部の第6次・11次調査では礎石建物の存在が想定される発見が、第7次・10次調査では未確認であった大友館北限に関する情報が得られた。また第12次調査では大友氏館跡の形成時期と考えられる14世紀後半の整然と配された複数の掘立柱建物跡が確認されるなど、重要な発見が相次いだ。これと並行して、「府内古図」に記される大友氏の菩提寺の一つである万寿寺跡にも初めて発掘調査が行われた。

旧万寿寺跡の調査と追加指定 当地には昭和30年代より大分協同乳業や九州乳業株式会社の広大な工場があったが、平成12年(2000)の工場移転に伴ない、その跡地における遺跡の状況を確認することを目的に発掘調査が行われた。調査は平成14年(2002)8月27日～12月24日まで実施した。結果として、一部工場の基礎による破壊がみられたが、遺構の遺存状況は良好であり、万寿寺の主要伽藍を構成した可能性のある堀込地業の痕跡や多量の瓦などを確認した。

本市では、広大な大友氏遺跡の史跡指定について、事前の発掘調査によってその存在が明らかとなった範囲の中から、都市計画事業との調整を図りつつ優先順位を検討し、各種条件のそろった場所から指定拡大を進めてきた。このため史跡の指定は、平成13年8月13日に第1次指定が行われたのを皮切りに、段階的・継続的に行われてきた。上記の発掘調査成果をふまえて、平成17年3月2日には、旧万寿寺跡の一部と北側の武家地や町家跡が混在する地区が「旧万寿寺地区」として追加指定される。この第5次指定にあたる、旧万寿寺地区の指定に伴い、指定名称が「大友氏館跡」から「大友氏遺跡」に変更された。

6. 様々な史跡活用の取組

発掘調査の進展と並行して、指定年度以降も遺跡の活用をめぐるさまざまな取組が行われた。

アート循環系サイトと大友館 大分市美術館 特別企画

展 大分現代美術展 2002『アート循環系サイト』において、大友氏館庭園跡の埋め立て地に土のオブジェ「土の記憶」(大久保英治作)を設置(図 29)。当時実施中だった第 12 次調査の南側に忽然と姿を現したアート作品は遺跡という場に新たな視点を生んだ。庭園跡横にあった大型マンションの子どもたちも参加したこのイベントは、遺跡という場のもつ多様性を示す一例であり、史跡のあゆみの一頁として記録されるべきものである。



図29 大友氏館跡内に設置された「土の記憶」(上)と看板(左下)平成14年6月4日撮影

市民団体による情報発信 平成 11 年に発足した「大友氏関連の遺跡保存を考える会」(会長加藤知弘氏)は、(大分の未来を考える会、ふらんしすこ、歴史と自然を守る会、市民サークル OCTV などの 13 団体が連携し、大友氏に関連する遺跡保存への機運を盛り上げ、遺跡を活用したまちづくりへの提言や大分の歴史を全国にアピールするために結成された。平成 15 年、この「大友氏関連の遺跡保存を考える会」が実行委員会となり、大分放送(OBS)が企画・運営する「大友河原市」が大分川河川敷で行われた。大友氏館跡や府内町の復元 CG の公開、出土品の展示等々、大友氏や「商都」豊後府内の繁栄の様子をわかりやすく情報発信するとともに、さまざまな店が居並ぶ「市」の再現が 3 日間にわたり催された。

七夕まつりの変化 平成 16 年当時、第 20 回をむかえる大イベント大分七夕まつりにも変化が起こった。まつりのテーマに初めて宗麟公の名が高々と掲げられた。「甦れ宗麟—2004 府内戦紙」である。記念大会となったこの夏、宗麟公をはじめとする 23 の戦紙が勇壮に駆け廻った。宗麟公が「県都大分市の顔」となった瞬間であった。



図30 七夕まつり 府内戦紙風景(写真は大友宗麟の戦紙)平成29年8月撮影

大友氏関連フェスタの開催 平成 16 年度には、大分市美術館の特別展「南蛮文化精華—ザビエル・宗麟・キリスト教」を共通テーマとして、歴史資料館、文化財課が連携して、大友氏関連の情報を発信する事業を行った。
内容 大分市美術館 特別展「南蛮文化精華—ザビエル・宗麟・キリスト教」(9月17日～10月24日)、大分市歴史資料館 特集展示「府内と宗麟の時代」(9月17日～10月17日)の開催

文化財課 「見て 聞いて さわって知ろう 宗麟の館とまち」—南蛮の都として輝いた豊後府内

- ・大友氏館跡現地説明会 [県・市合同] (9月26日)
- ・上野史蹟探訪「上野台地に所在する大友氏ゆかりの地を歩く」(10月10日)
- ・北部九州中近世城郭研究大会「シンポジウム 高崎城をめぐる諸問題—大友の城を考える」[高崎城現地見学会 (10月2日)・シンポジウム (10月3日)]

・大友バスツアー「バスで巡る宗麟の館とまち」(9月29日)

大友氏をテーマにして関係機関が協力して企画した初めての取り組みでもあった。台風などの影響により、バスツアーや現地説明会など一部の企画が中止となったが、市民の反響は思いのほか高く、こうした企画の継続を希望する意見が数多く寄せられた。

平成 17 年 (2005) 度からは、遺跡の調査成果を間近で見学してもらう現地説明会を軸にしながら、幅広い層に最新の調査・研究成果を伝えることを目的とした「大友氏遺跡フェスタ」が始まる。毎年多くの団体・機関とコラボレーションを行いながら文化財課が主催する恒例

のイベントとして定着し（図 31）巻頭図版 9 頁に示すようにさまざまなイベントを実施し現在にいたる。



図31 大友氏遺跡フェスタ2012(城址公園での遺跡パネル展会場)

7. 進む大友氏遺跡の保存活用に関する取組

大友氏遺跡の保護に係る取組は、史跡が国道やJRに囲まれ、中心市街地に立地するという性格から、文化財保護とまちづくりの両面から様々な検討や調整を行いつつ進められてきた。

おおいた都心まちづくり会議との連携 前記した『大友遺跡検討委員会報告』の中で、長谷目委員長は、大分市が計画する2010大分市総合計画に基づく各種基盤整備事業との調和の中で、大友氏館跡の具体的な保存整備のあり方等々、多くの課題や難問が山積していることも認識する中で、今後は、歴史を活かしたまちづくりの実現に向け、数多くの課題を総合的に、また専門的に検討し、調整することのできる新体制づくりの必要性を強く述べられた。事業推進に向け新たな取組が必要となった。おりしも「大分駅付近連続立体交差事業」、「大分駅南土地区画整備事業」及び「庄の原佐野線等関連街路事業」を三位一体の事業とする大分駅周辺総合整備事業も新たな段階を迎えていた。南北市街地の一体化を図り、駅北商業業務中核都心と駅南情報文化新都心との役割分担を行う中で、県都大分にふさわしいスケールの大きな都市空間と潤いのある新都心を創出しようとしていたのである。

このように、駅南区画整理事業が進展する中、平成16年、大分中心市街地の総合的なまちづくりの視点に立って、市民参加の議論を活性化するための「おおいた都心まちづくり会議」が発足する。大友氏館跡は中心市

街地の一角にあり、その保存・活用はまさにまちづくりである。遺跡が都市計画のなかにしっかりと位置づけられ、県都大分市の「顔」づくりにかかせない資産として反映させることが必須であることを考えると、「おおいた都心まちづくり会議」の発足は、大友氏遺跡の整備進展にあたり時宜を得たものであった。

大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会の設置

「都心まちづくり会議」の発足をうけ、教育委員会は、これと協調する組織として、「大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会」（委員長：河原純之）を設置した。委員会の目的は、中世豊後府内の都市景観を現在のまちづくりの中に活かし、史跡の保存整備とともに、ハード・ソフトの両面から実効的かつ適切な活用施策を検討し、その実施に向けての保存活用計画（案）を作成することである。委員会では、大友遺跡検討委員会報告に基づきながら、対象エリアの設定や整備の具体的な方向性、景観法に基づく景観計画（景観地区または景観計画区域）の指定や位置づけ等々、史跡保存整備のみならず都市整備との連携が必要となった。よって学識経験者として景観デザイン、建築史・都市史、都市計画を専門とする委員、歴史学、考古学の委員、市民・住民との連携から大分市商店街や学生等が委員として参画した。検討結果は、平成17年度末に報告されている（図 32）。この時の報告書では大友氏館跡の整備について、庭園跡の復元、築地塀、門の立体復元整備を短期整備として挙げ、平成27年頃までの整備完了が望ましいとした。また、館内部については発掘調査の成果を待ち、中・長期計画としての整備方針の策定を目指すという提言がなされている。

この提言を踏まえ、「大友氏館跡」区域の復元整備の具体化に向けた調査として、平成24年度から庭園部分の発掘調査に着手する。なお、この報告書については、近年の調査成果の反映、史跡指定や都市計画事業の進捗状況、仮設ガイダンス施設（大友氏遺跡体験学習館）が開館し活用事業が先行して進んでいることなど、現状を踏まえた見直しが必要となり後述する「史跡大友氏遺跡整備基本計画」への策定へつながっていく。

平成16年度に策定された都市計画マスタープランでは、大友氏に関連する遺跡は歴史文化観光拠点の形成を

図る場所という位置づけがなされ、平成18年には大友氏館跡の一部が都市計画法による公園区域に指定された。また、平成21・22年度(2009・2010)の発掘調査により館南側に推定御蔵場跡が確認されたこと、旧万寿寺地区を含めた史跡の一体活用という観点から公園利便施設の場所を見直したことなどから、2回の計画変更を経て、現在の「大友氏遺跡歴史公園」は、旧万寿寺地区と推定御蔵場跡を含む17.5haに拡張した。

このように、平成17年度末時点において、史跡大友氏遺跡としてのフレームができ、まちづくりの観点からも歴史文化観光拠点として位置づけが明確となった。また、都市計画法に基づいて「大友氏館跡歴史公園」の事業認可が行われた他、大友氏遺跡の保存活用に関する指針として、大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会報告書(図32)が提示されるなど、現在につながる大友氏遺跡の史跡整備に向けての基盤が整うこととなる。

図32 「大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会報告書」(平成18年3月刊行)



府内のまちイラスト(「府内古図でまちあるき」イベントで配布したクリアファイルより)

【コラム 良く聞かれる大友氏館跡の表記方法】

大友氏遺跡は、本書冒頭でのべたように大友氏館跡をはじめとする計5つの遺跡で構成された国指定史跡です。史跡指定当初は「国指定史跡 大友氏館跡」という名称でしたが、その後の追加で「国指定史跡 大友氏遺跡」となったことから、広報などで大友氏館跡を説明する場合は、「国指定史跡 大友氏館跡」ではなく「国指定史跡 大友氏遺跡の一つである大友氏館跡」というややまわりくどい表現となります。事業の初期は「大友遺跡」「大友氏館」「大友氏館跡」「大友館」などさまざまな呼称が使用されていました。

平成24年に策定した『史跡大友氏遺跡保存管理計画』の凡例にて「大友氏の館跡」を指す用語については、史跡指定時の名称である「大友氏館跡」を用いることを原則とし、歴史上の文脈において特に必要な場合は「大友館」の語を用いている。」とし、さらに、「大友氏遺跡をその一部とする中世都市遺跡については、「豊後府内」と呼ばれることが多いが、歴史的名称としての「豊後府内」が指し示す地域概念は下郡などの大分川東岸地域や、外港である沖ノ浜まで含む広範囲なものであるため、本書の記述では周知の埋蔵文化財包蔵地の名称「中世大友府内町跡」を原則として用いた。」と記載されました。つまり、過去にあった館のことを呼称する場合は「大友館」となりますが、現在からみた大友館の場所は「大友氏館跡」となるので、文章の文脈にあわせて、「大友館」や「大友氏館跡」を使い分けるといったことになります。当たり前といえばその通りですが、同様に、令和元年6月に開園した庭園跡も、整備された庭園は庭園跡ではないので「大友氏館跡庭園」、整備された対象は遺跡なので「大友氏館庭園跡」と、呼び分けています。これは遺跡としての「中世大友府内町跡」と、当時のまちを「府内のまち」や「豊後府内」と呼びかえるのも同様の理由です。よく質問される内容なのでここに記載しました。(長直信)

【特別寄稿】

「文部科学省5階のエレベーターホール」

元文化庁文化財主任調査官・伊藤正義

私は、平成6年（1994）4月に福島県立博物館学芸員から文化庁記念物課の史跡部門の文化財調査官に転任し、19年3月に主任文化財調査官を退官して、鶴見大学文化財学科教授に転出しました。文化庁記念物課に13年間在職して、史跡の①指定・追加指定、②現状変更、③公有化、④整備活用などに従事しました。①②③は、開発行為と競合する、利害関係の調整が難しいハードな仕事でした。

大友氏館跡は、平成10年から始まった本格的な発掘調査の成果と『大分市史』の地割り・地名調査、「府内古図」の研究成果などから、方二町（約200×200m）の典型的な守護館であり、南側で検出された戦国時代最大の庭園跡から、京都の室町將軍邸（花の御所）、細川管領屋敷を模したものと推定されました。県都の大分市の一角で、約40,000㎡の広大な面積を史跡指定して公有化出来るのか、たじろがざるを得ませんでした。大友氏館跡は、私が在職中に担当した史跡指定の中で最も難しい案件でした。

平成11年（1999）の3月頃だったと思います。午後4時過ぎ頃から文化庁の小会議室で史跡部門の私（伊藤調査官）、埋蔵文化財・坂井秀弥調査官、名勝整備・本中眞調査官と大分県教育庁文化課埋蔵文化財第一係長の坂本嘉弘氏、大分市教育委員会文化財課長の秦政博氏、主幹の玉永光洋氏の6名で、大友氏館跡の史跡指定の可否について協議しました。大友氏館跡は、大分市が実施する大分駅周辺の都市再開発と区画整理事業に伴う住民の移転先に予定されていました。大友氏館跡を史跡に指定して保存する場合は、大分市の都市計画事業を大幅に変更する必要がありました。都市計画事業とバッティングすることが最大のネックで、史跡指定は諦めざるを得ないとの結論に至りましたが、協議の中で私は大分県と大分市は文化庁の本気度確かめに来たと言う感触を得ていました。

当時の惣脇宏記念物課長は、歴史が好きで趣味は遺跡・

史跡巡りと言う、文化財保護に熱心な課長でした。大友氏館跡についても関心が深く、私は時々大友館跡の問題点について意見を求められていました。大友氏館跡の史跡指定断念は、記念物課長の了解を得なければならない重要案件でしたが、その日課長は出張で不在でした。6時過ぎ頃に協議が終了した後に、私は県市の3人にエレベーターホールで待つように耳打ちして、すぐに戻って「史跡指定は諦めていない。明日課長を説得して了解を得る」と伝えました。翌日課長に、文化庁が本気で史跡指定する方針であれば、県市は文化庁の決定に従うことを説明して、課長の了解を得てすぐに、電話で県市に文化庁の史跡指定の方針決定を伝えました。

大分市役所内では都市計画を変更して、指定地公有化の予算（8割国負担・2割県市負担）を確保しなければなりません。土地の公有化と手厚い補償について丁寧に説明しなければ地権者の指定同意を得ることは出来ません。私は大分市に、文化財課に都市計画に詳しい人材、財政に詳しい人材、土地の買い上げと補償交渉に強い人材を補強配置することを求めました。財政畑のエキスパートの帯刀修一課長補佐は市財政を説得して、歴代市長は大友館跡の史跡指定と整備を市の中心事業に採択しました。県は応分の財政支援を負担して、全面的にバックアップしてくれました。

今でも文部科学省5階のエレベーターホールで待つうなだれた3人の姿が目につかびます。惣脇記念物課長の決定を伝える受話器の向こうであがった歓声が私の耳によみがえります。



図33 大友氏館跡第1次調査説明会風景（平成10年11月28日）

【インタビュー③ 発掘作業員さんが語る大友氏遺跡】



図34 左より林房枝さん・薬師寺由紀子さん・松尾さよ子さん・井野和歌子さん（大友氏館跡庭園にて撮影）

紹介 平成10年、大友氏館跡第1次調査の発掘には大友氏館跡に隣接する錦町に在住の方を中心に16人の発掘作業員さんが参加し、調査担当者であった高畠豊技師（現文化財課参事）の監督のもと巨大な景石などを発掘。庭園跡であることを突き止めました。今回この調査に参加した4人の元発掘作業員さんに当時の状況や遺跡の発掘調査の思い出を語っていただきました。

●みなさんの発掘調査との関わりを教えてください。

井野さん：平成10年4月に発掘をはじめた。以後17年以上発掘調査作業員としてたくさんの方の遺跡を掘った。その後、市道錦町長浜線の建設に伴う発掘調査を最後に平成27年頃に引退した。ちなみに、元々、庭園跡の上に建っていた森産業で仕事をしていました。その頃、近所の方が発掘調査（当時錦町で発掘中だった中世大友府内町跡第1次調査と思われる）から帰ってきているのを見て、発掘の仕事があるのを知った。家から近い場所でやっているということだったので私もやりたいと。これがきっかけで発掘作業員をするようになった。

松尾さん：松岡で大分県教育委員会が実施するスポーツ公園を造る際の調査の頃（平成8年頃）から発掘を始めた。大分市教育委員会が実施した荷揚町体育館の建替えに伴う発掘調査（府内城・城下町跡）や大友氏館跡などたくさんの方の現場に行った。平成19年に実施した大友氏館跡第20次調査や平成24年に実施した大分市元町の帆秋病院があるところの調査（中世大友府内町跡第97次調査）なども行い、平成24年頃に引退した。

林さん：井野さんの紹介で発掘作業員を始めた。平成10年11月に大友氏館跡の調査（第1次調査）に行ったのが最初で、以後たくさんの方の現場に行き、平成31年1月の大友氏館跡の調査（第38次調査）を最後に引退し

た。井野さんと同様、発掘作業をする前は、森産業で働いていた。とても忙しかった。もともと顕徳町3丁目の大友氏館跡の中にあつたアパートに住んでいた。さらに、今年72歳になる主人が小学校6年生の頃の担任が、大友氏館跡の確認調査を担当し、その後中世大友府内町跡第1次調査などを担当した杉崎重臣さん（インタビュー②32頁参照）だった。元々大友氏館跡に住んでいたことも含めていろいろ縁があると思っている。

薬師寺さん：松尾さんと同じくスポーツ公園ができるときに大分県教育委員会が実施した現場（一方平遺跡）から発掘調査に参加している。山の上だったので木の根っこを切るのが大変な現場だった。その後の発掘調査ではレベル（測量器具）の数値を読んだり図面を書いたりしていた。平成15年に大分県教育委員会が実施した賀来にある宮苑遺跡の調査を最後に引退した。

●ここからは大友氏館跡の最初の調査のことについて教えてください。こちらの写真（図35・巻頭図版20）を覚えていますか？大友氏館跡第1次調査がほぼ終わったころの発掘作業員さんの集合写真です。平成11年5月頃の写真と思います。

みなさん：覚えている。概ね誰がどこにいるかわかると思う。みんなの場所は図35のようになると思う。

●この庭園跡の調査の思い出を教えてください。

井野さん：当時、錦町2・3丁目の住民が発掘作業員として来ていた。あと、当時佐藤道文さん（現文化財課参事補）がアルバイトで庭園の発掘に来ていた。

井野さん：1次調査は16人の作業員がいたが、男性が3名しかおらず、発掘作業は大変だった。女性はみんな男性以上に頑張った。

●大きな石がでてきたときのこと覚えていますか？

みなさん：覚えている。

井野さん：この写真で景石のまわりを掘っているのは私（巻頭図版17中央一番上の白い服の人物）。

●皆さんはだれよりも早く450年前の庭園景石と対面した方々ということですね。

●当時の調査で大変だったことを教えてください。

井野・松尾さん：掘った土を運ぶもの大変だったが、発掘調査面積が広いので（2200㎡）、毎日ブルーシートを

かけたり、剥いだりするのがとても大変だった(註1)。

井野さん：台風のと現場がプールになったことがある。この時、現場にあった仮設トイレが現場内で浮いていた(図18)。また、ブルーシートの上を歩いたら下に地面がなくて池跡に落ちたこともあった。

●その他、発掘調査の思い出はありますか？

井野さん：大友氏館第21次調査で見つけた珍しい青磁や陶磁器の破片のこと。当時現場にテレビの取材が来て予定外にコメントを求められたことがあった。発掘しながらどんなことを考えているかと聞かれて「夕ご飯のことを考えてます。」と答えてしまって恥ずかしかった記憶がある。また、大友館の中心建物付近を掘ったとき(大友氏館跡第6次調査)土がとても固くて大変だった。あと、遺跡からは土で作った安産のお守りの犬型人形がいっぱい出たのを覚えている。

●この時見つかった陶磁器は、その後研究が進んだことで全国でも極めて珍しい中国元時代の青花であることがわかっています。大友氏の遺跡のすごさは近年全国的にも知られるようになってきており、南蛮BVNGO交流館が設置され、庭園が整備されたことで観光地としての認知も進んでいます。みなさんが日々遺跡を発掘し、地下から掘り上げていただいたおかげで、この20年、大分市の歴史の復元が大きく進みました。本当に助かっています。いずれ歴史公園内に整備する歴史文化観光拠点施設という場所が整備されたら、みなさんが掘っていた遺物などの資料を展示することになると思いますので楽しみにしておいて下さい。

●大友氏の遺跡の発掘現場で一番大変なのは何でしょうか？

井野さん：井戸掘り(註2)。発掘すると必ずといってよいほど井戸跡が出る。何よりも深い穴なので掘削作業は大変だった。

●大友氏館跡に限らず、発掘の醍醐味とはなんですか？夏暑くて冬寒いということもあり、なかなか若手の作業員さんが少ないのが現状です。

林さん：発掘は楽しかった。

薬師寺さん：やりだしたら少しずつ興味が出る。

井野さん：JA 葬祭場の調査(中世大友府内町跡第6次調査)で深い堀を掘ったり、市営の雨水排水ポンプ場(中世

大友府内町跡第17次調査)の広い現場も思い出深い。発掘した17年間にどれくらいの土を動かしたんだろうか?と思う。身体を痛めることなくよくやってきたと思う。これまで井戸掘りもいくつかしたことか。井戸から地下水が出て大変な現場もあったがやりがいのある仕事だった。

松尾さん：作業員さん同士の関係がよければ多少現場がきつくても楽しい。

●2030年までには大友氏館跡の中心建物などを復元して整備が完了する予定です。

松尾さん：楽しみですですね。

●館の整備事業が終わった際は、一緒に遺跡を掘ってくれた発掘作業員さんにかけて声をかけてお礼を申し上げたいですね。今後も大友氏館跡の整備完了を楽しみにしてください。南蛮BVNGO交流館や整備後の庭園にはまだ行ってない方もいらっしゃると思いますので、南蛮BVNGO交流館と大友氏館跡庭園をご案内します。

[庭園にて]

●皆さんが発掘調査していただいた庭園跡はこのような姿になりました。

みなさん：とても感慨深い。

松尾さん：とても気持ちのいい場所。今度またゆっくりきたいと思う。

●本日は貴重なお話ありがとうございました。またお越し下さい。

(聞き手：長 令和3年12月6日インタビュー)

(註1) 遺跡を保護するため現場の終わりには通常シートをかける。

(註2) 中世大友府内町跡は、14世紀後半から16世紀末までの200年にわたって多くの人が生活する大都市だった。人々は、生活に必要な水を確保するため、たくさんの井戸を掘った。そのため、井野さんが言うとおりの中世大友府内町跡を調査すると必ずと言ってよいほど井戸跡が見つかる。



図35 大友氏館跡第1次調査終了時の集合写真

8. 公有化拡大期

公有化事業の現状

事業の推進と連動して平成18年(2006)以後は、土地の公有化が加速する。地域の住民からみれば従来あった地域コミュニティの



図36 2006年3月の大友館上空

維持が難しくなってくる時期である。平成13年の指定当時、大友氏館跡内には、アパート・マンション、店舗等が密集しており、ただちに全体指定並びに公有化は困難であると考えられた。よって、当面は空き地となっている箇所での新規集合住宅やマンション建設計画時、及び老朽化等による住宅建替時、並びに居住者からの申し入れ等による用地取得を随時行い、長期的な視野に立った遺跡の保存を図る方向で進められた。平成18年以降、公有化事業は大きく進み平成18年3月時点の景観から、平成19年～平成24年度の5カ年(図36、図40、図41)内に空地が目に見えて増えていく。

このような公有化事業が拡大する直前にあたる平成18年10月、中世大友再発見フォーラムから5年がたち、その間の調査研究成果を広く発信するため10月8日、中世大友再発見フォーラムⅡが開催された。午前中は大友氏館跡中心建物跡の調査(第17次調査)成果を



図37 反対看板①



図38 反対看板②

公開、午後は荻谷俊介氏の特別講演とパネルディスカッションを行う内容であった。この遺跡現地説明会では500人近くの来訪者が訪れ(図39)、大友氏館跡第1次調査での説明会に次ぐ規模の来訪があった。遺跡の説明会としては成功とい

えるものの、公有化に対する地域住民の事業に対する反対看板(図37・38)が一斉に出されることになる。

その後、対話を重ねる中で、平成21年(2009)には大型マンションの移転が決定、解体されるに至る(図42)。さらに平成24年度(2012)には最も大型のマンションが解体(図42)。結果として、およそ250世帯が移転することとなる。マンションやアパート戸建住宅が密集する立体的な1990年代後半以来の顕徳町3丁目の風景がこの頃には、昭和20年代頃の様な何もない平坦な広場へと変わっていく。

この頃の住民の心情については、史跡指定が決まり公有化事業が

開始する時期に顕徳町の自治委員を務められていた御手洗孝一氏のインタビュー(58～62頁)により伺い知ることができる。華やかな調査研究成果の裏側で、こうした大規模な移転による地域住民の多大な負担と理解に応えるに足るまちづくり事業となるよう、覚悟と決意をもって事業を進めていかなくてはならない。「『終の棲家と考えていた家を提供し、移転してくれた地域の皆様のご苦勞に少しでも報いるために史跡の重要性をもっともっと正確に、できるだけ広くアピールし、一日も早く整備にこぎつけなければ。』という焦燥感に背を押されるようにこれ以降は積極的な情報発信を展開することになった」



図39 大友氏館跡第17次現地説明会(2006年10月)



図40 2007年9月の大友氏館跡全景(南から)



図41 2010年5月の大友氏館跡全景(南から)



図42 2012年11月 大型マンション解体状況 大友氏館跡第28次調査地点から

との関係職員のコメントがあり、実際に以下で述べる、平成 25 年度の大分市制 100 周年の各種記念イベントを皮切りに、極めて多様な情報発信が行われることとなる。

解明が進む大友氏遺跡 公有化によって、未解明であった大友氏館跡の調査は新たな発見が相次ぐ。平成 20 年(2008)には館東端部の第 21 次調査において高級陶磁器である元青花や元青磁が確認され(巻頭図版 24)、大友氏の財力や威信を示す発見があったほか(インタビュー③ 44 頁参照)、第 22 次調査では館東側を囲む築地を想定させる痕跡が見つかり、平成 24 年度にはその延長部分にあたる第 28 次調査にて実際に築地本体を確認するに至る(巻頭図版 26)。また、平成 24 年度以後は、庭園南側に敷設されていた JR 日豊本線の高架事業が完了したことから、平成 11 年度に実施した庭園域の調査である第 3 次調査から実に 13 年ぶりに再開される。

これに前後して、大友氏館跡南側に想定されていた御蔵場跡について初めて発掘調査が行われた。調査経緯としては、大友氏遺跡は、平成 17 年の旧万寿寺地区の追加指定以来、守護館である大友氏館跡、大友氏の菩提寺のひとつである旧万寿寺地区、「府内古図」に記載される御蔵場跡の三位一体による保存・活用・整備が不可欠であるとされてきた。御蔵場跡の存在が推定される地域は、昭和 36 年(1961)に都市計画決定を受けた元町公園範囲内に包括されていたため、遺跡に影響を与えるような開発は規制され、遺跡の保護・保存が図られてきた。ところが、平成 21 年に大分市市内の長期未着手大規模公園の見直しがなされ、元町公園予定地が見直し対象とされた。これにより、推定御蔵場跡の保護・保存のため

の範囲確認が急務となり、平成 21 年度、22 年度の 2 カ年にわたり確認調査を実施することになった。調査の結果、15 世紀前後から 16 世紀中頃の武家居館と考えられる遺構と、16 世紀後半から末頃の溝や築地状の遺構で囲まれた大型施設が形成されることがわかった。施設内部には掘立柱建物跡や火災処理土坑、図 43 に示す穴を掘って巨大な礎石を廃棄した遺構とともに、広い空閑地が複数地点で確認されており、これまでの調査で確認されている町家や武家・社寺地とは異なる様相が明らかとなった。この大型施設は、約 1.8ha で「L 字」状の平面形状を持つと考えられた。詳細は今後の調査によることも多いものの、この範囲は蔵場としての利用を含め大友館に付帯する特別な公共空間として性格付けられ、平成 27 年に大友氏遺跡の一つとして追加指定された。

前年の平成 26 年 10 月には、永く大友館として知られていた上原館跡も追加指定される。上原館跡は東西 130m、南北 156m あり、この北西部に曲輪と考えられる南北 40m、東西 30m の張り出し部をもつ。周囲(西・南・東面)には幅 10～30m の空堀がめぐり、現状で基底部幅約 17m、高さ 4m を超える土塁と堀跡の一部が良好に残っている(図 44)。

平成 29 年には大友氏館跡に隣接する唐人町跡が追加指定される。唐人町は全国の城下町で確認されているが、本事例のように当主の館に隣接して配置されることは稀であり、貿易等を通じた大友氏との密接な関係が想定されることから「南蛮文化発祥の地」「国際貿易都市遺跡」としての価値を具現化した遺跡として評価されている。なお、図 45 は骨牌と呼ばれる象牙などで作られた遺物で麻雀牌の祖形ともいわれる。中国(明)で流行してい



図43 推定御蔵場跡内部の調査状況



図44 上原館跡 空中写真(2018年8月)



図45 唐人町跡で出土した骨牌

た遊具であり、日本人には馴染みのない玩具であることから、骨牌の出土は中国人が居住した証拠品として重要なものである。

これら一連の追加指定によって、中世大友府内町跡周辺の重要遺跡は、今後発見が予想される教会跡地を除きすべてが大友氏遺跡として指定されるに至った。

9. 情報発信基地の整備と多様な活用施策

大友氏館跡が国史跡になる前後から、官民において大友宗麟にちなんだ様々なイベントが実施されてきた。例えば、平成20年10月には「大分薪能」と題して作能「宗麟」が府内城跡で実施されるなど（『豊後府内城跡薪能の会』主催 文化庁大分県地域文化芸術推進事業）大きなイベントも開催されていた。この平成20年は大友氏館跡の発掘調査（1次調査）が始まって10年の節目であり大友氏遺跡フェスタ2008では大分銀行赤レンガ館2階大ホールにて10年の研究成果を総括する講座が実施された。大分県・市が取り組む各種公共事業によって進展した中世大友府内町跡（当時80次調査まで実施）、大友氏館跡（当時21次調査まで実施）の調査成果や、文献史料からみた新たな大友氏の姿などを伝える場となった。

情報発信基地の整備 平成20年4月25日、「大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会報告書」の提言を踏まえて、本整備を実施するまでの公開活用を行う施設として、旧万寿寺地区に大友氏遺跡体験学習館（以下、体験館）を開館した。「知ろう！触れよう！感じよう！調べよう！」をコンセプトに出土品の展示や出土品に触れることができるコーナーを設けると共に、映像を使った



図46 大友氏遺跡体験学習館

遺跡の解説なども行った。中世の歴史を学び、調べ学習が行える施設であり、主に大分市民を対象とした大友氏遺跡唯一の情報発信拠点として幅

広い層に親しまれた。表2や資料編にも示すように、様々な体験学習メニューを開発した他、独自のイベントとして、南蛮かぼちゃの栽培イベントや大友氏館跡周辺のまちをめぐる「大友府内旧跡めぐり」、大友氏の山城である高崎山の解説をしながら山登りをする「高崎山のお城に登ろう！」などがあり、「大友氏遺跡検定」では、大友氏や大友氏遺跡に関する講座を受講してもらい、初級・中級・上級の

イベント名・内容	
イベント	1.南蛮文化にふれよう「南蛮かぼちゃ」苗植え祭 南蛮文化にふれよう「南蛮かぼちゃ」収穫祭
	2.こどもの日特別企画「戦国武将になろう」
	3.大友府内旧跡めぐり
	4.「火縄銃に触れよう」～大友鉄砲隊～ こどもの日企画「火縄銃の演武」
	5.体験講座「合戦！大友鉄砲隊」
	6.高崎山のお城に登ろう
	7.こどもの日企画「ゴム鉄砲競技大会」
	8.鶴賀城に登ろう
	9.戦国武将になろう
	10.大友氏遺跡フェスタ 「大友府内旧跡めぐり」「大友氏遺跡検定」

イベント名・内容	
体験学習	1.「お守り犬」～粘土でつくりよう～
	2.土器に触れよう！
	3.ペーパークラフトでつくる宗麟
	4.「南蛮貿易船」紙で作ろう南蛮船
	5.信仰ルリ玉づくり
	6.「絵手紙」～暑中見舞を描こう～
	7.「ろうそく」作ろうオリジナルキャンドル
	8.「羽子板」絵付けしよう飾り羽子板
	9.「印影」作ろうお手製スタンプ
	10.「うちわ」～切り絵をしよう～
	11.「ゴム鉄砲」～作って当ててみよう～
	12.「大友館」～戦国時代のまちをつくりよう～
	13.戦国工房「焼き物絵付け体験」
	14.戦国工房「スタンドグラス製作」
	15.「スタンプ」～作って押してみよう～
	16.戦国工房「戦国の武将・姫の香り製作」
	17.「節句飾り」～紙で作ろう～
	18.自由研究～歴史新聞をつくりよう～
	19.「かぶと」～作って飾ろう～
	20.「土器」～こねて焼こう
	21.染色をしよう
	22.風鈴を作ろう
	23.切り絵
	24.発掘体験をしよう
	25.茶道を学ぼう
	26.万華鏡を作ろう

表2 大友氏遺跡体験学習館 イベント・体験学習一覧

検定試験に臨んでもらう内容であった。また、小中学生への発掘体験や職場体験なども積極的に受け入れ、大友氏の遺跡に関する業務を知ってもらう機会を設けた。平成30年9月17日に閉館するまでの約10年間、若年層から歴史に詳しい方まで、累計78,524人に来訪いただいた。

市民との協働 平成22年には、文化財の普及活用について、市民との協働を始める。大友氏遺跡の整備・活用・管理等について行政とともに活動していただける市民組織の必要性があり、ボランティアを募ったところ100名を超える個人・団体の応募があった。平成23年1月に「おおいだ大友歴史保存会」と称する組織が正式に発足する。大友氏遺跡の普及・啓発を目的として、体験館を拠点に、様々なイベントを行った。大友氏が行った新年の儀式である「大おもて」を、現代風に構成を置き換え、大友氏

遺跡の周知と当時のような賑わいを創出した「楽市楽座大おもて会」(平成23年2月27日)、大分市誕生100年記念事業として戦国時代のクリスマスをテーマとした「フェスティビタス・ナタリス in Bungo」(平成24年12月8日)を開催した。平成24年度は、開館5年目を迎える体験館の年間利用者が、初めて1万人を突破。上記イベントが体験館のある大友氏遺跡多目的広場で開催されたこともあり、国史跡に指定されて11年目を迎え、大友宗麟公や大友氏遺跡が地域住民を中心に着実に浸透してきたことを実感する時期である。なお、おおいた大友歴史保存会は、その後「おおいた応援隊大友歴史保存会」として自立した活動を行っている。

遺跡看板整備 史跡指定翌年の平成14年、大友氏館跡の史跡指定地内に初めて説明板を設置した(図47)。その後、体験館の設置にあわせて、平成17年度～19年度にかけて、「大友旧跡めぐり」という名称で、大友氏館跡・旧万寿寺跡をはじめ、戦国時代から変わらない場所にある稲荷社や来迎寺などの寺社、中世大友府内町跡



図47 「国指定史跡 大友氏館跡」の看板と府内めぐりの風景(2008年11月撮影)



図48 平成18年度に設置した「稲荷社」の府内めぐりサイン

史跡整備班の設置 平成23年4月には大友氏館跡の史跡整備と情報発信を一手に手掛ける部署として、文化財課内に史跡整備班が設置される。用地買収事業や情報発信事業、そして大友氏遺跡の発掘調査を主たる業務とし、以後、さまざまな取組が進んでいく。

大友プロモーション事業 平成25年度からは観光課と文化財課による大友プロモーション事業が開始。「大友宗麟公とその時代」の功績を学び、守り、活かし、育てていくことを通じて、ふるさとの愛着心や誇りの醸成を図るとともに、本市の歴史特性や魅力を全国に情報発信することにより、認知度向上や誘客につなげることを目的とする事業である。主な活動は、宗麟公まつりの開催・大友氏ゆかりの史跡を巡るツアー・NHK大河ドラマの誘致などである。令和3年で8回目をむかえた「宗麟公まつり」は秋の風物詩として市を代表するまつりになっている。

キリシタン・南蛮文化交流協定協議会事業 平成25年、大友宗麟やキリシタン南蛮文化にゆかりのある自治体が連携協力を図り、情報や人的交流を組織的に展開することにより、地域に残る文化遺産をより広く周知させ、それぞれの市町のまちづくりの推進及び地域振興、観光振興の活性化につなげることを目的とした協議会が発足。その発端は、平成25年度～27年度に実施した文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業」(以下、活性化事業)を活用した「おおいたのキリシタン・南蛮文化遺産活用・発信プロジェクトin大分市」の事業である。長い歴史の中で埋もれてしまった大分のキリシタン・南蛮文化の輝きを取り戻すため、関係市町村と連携した取り組みを進めていたことによる。平成28年1月には、活性化事業の中で関係自治体の首長が一堂に会した「おおいたのキリシタン・南蛮文化遺産シンポジウム」を開催。これを契機に、翌月「キリシタン・南蛮文化交流協定」が締結されるにいたる。現在、津久見市・臼杵市・竹田市・由布市・日出町・国東市・大分市の6市1町で活動を進めている。平成26年度までの活性化事業については『おおいたのキリシタン・南蛮文化遺産活用・発信プロジェクトin大分市 記録集』に詳細が記されている。

平成25年度以前も様々な規模で大友氏遺跡の情報発信を進めていたが、この当時は活性化事業と共に独自のイベントも実施しており、体制整備に連動した充実した情報発信事業が進む。

南蛮文化発祥都市宣言 その代表的なイベントが平成25年8月10日に実施した「南蛮文化国際フォーラム」である。大分市誕生100年と上智大学創立100周年を記念した共同事業であり、開館したばかりのホルトホール大分（現J：COMホルトホール大分）の大ホールで実施された。フォーラムでは、演劇などの様々な演目の他、記念講演ではオックスフォード大学より大航海時代の東西史や日本キリシタン史を研究されているウセル・アントニ氏を招き、大友宗麟と日本キリスト教の発展についての講演を、上智大学から高祖敏明氏による「世界にかけた大友宗麟」と題した講演を行った。文化財課で初めて実施した国際シンポジウムであったが、1493人もの来場者があり、フォーラムのサブタイトルのとおり「世界から宗麟を学び、おおいたを知る」場となった。このフォーラムで重要なのは市長による『南蛮文化発祥都市宣言』であった。郷土の戦国大名・大友宗麟公の功績と我が国でいち早く南蛮文化が花開いた豊後府内を誇りとし、魅力に満ちたふるさと大分を創造する決意を「南蛮文化発祥都市宣言」として、釘宮磐大分市長（当時）が力強く宣言した（巻頭図版15頁）。この大分市の個性を示す新たなキーワード「南蛮文化発祥都市」は、後に策定する大友氏遺跡の整備における基本目標の根幹となる言葉となる。

ヤギのいる史跡 公有化の進展に伴ない、年々文化財課が管理する空き地が増えていくこととなり、その維持管理のために夏場を中心に職員総出で草刈りを実施していた。こうした現状を踏まえて、平成27年6月15日、大友氏館跡にヤギを放牧した。広大な空き地となっていた大友氏館跡東半部の中心建物跡があった付近を柵で囲み、ヤギの手を借りて除草を行うという、県内の自治体では初の取り組みであった。当時の様子は管財課が平成27年6月19日から11月11日



図49 大友氏館跡の草を食べるヤギ

まで発行した「ヤギ除草レポート」でうかがえる。結果としてヤギによる除草は本件においては十分な成果を上げられず、11月16日に牧場へ帰っていくことになるが、遺跡でヤギにふれあえると近隣の幼稚園・保育園児をはじめ小学生や親子連れの家族など、これまで訪れたことのない層が来訪し、遺跡の存在を周知するのに一役買った。遺跡に関する歴史の一コマとして記録しておきたい。



図50 ヤギ除草レポートVol.16（最終号）

10. 整備基本構想と基本計画の策定

調査の進展と史跡指定地の拡大によって大友氏遺跡の大枠が固まり、調査・研究の整理も行われていく中で、平成25年10月「大友氏遺跡保存管理計画・整備基本構想検討委員会」が設置され、いよいよ具体的な整備計画の立案に向けて動きだした。タイトなスケジュールであったが、平成26年3月、①大友氏遺跡の適切な保存・活用を行い、②その価値を次世代へと継承するための長期的な指針、そして③歴史公園として大友氏遺跡を公開活用するための実現にむけた整備基本構想を含む『史跡大友氏遺跡保存管理計画』を策定した。続く、同年6月「史跡大友氏遺跡整備基本計画検討委員会」を設置し、大友氏館跡を中心とした基本計画の策定の為の検討が行われ、平成27年12月『史跡大友氏遺跡整備基本計画（第1期）』が策定された。以上の経過の中、史跡指定より14年を経て、整備事業が本格化する。詳細は各計画書を参照いただきたいが、特徴的な事柄について記しておく。

保存管理計画 これまでの調査研究成果を踏まえ、大友氏遺跡の本質的価値について整理が行われた点が重要である。大友氏遺跡の特性は、「大友氏400年の拠点」、「中世を代表する守護館の典型」、「地方最大級の禅宗寺院跡」、「南蛮文化発祥の地」、「国際貿易都市遺跡」、「機能分化した城館」に整理され、この6つの特性こそが、史跡として守り伝えるべき本質的価値であるとした。また、

史跡の周辺部には「中世大友氏に関連する重要な遺跡・推定地」や「現在の町割に継承される中世都市の地割」が存在する。これらは、中世大友氏の拠点として存続し続けた都市であるという史跡の価値を補完するものであり、一体で保全を図るべき環境であるとした。

整備基本構想 保存管理計画の第4章には整備における基本構想が示された。前提となる大友氏遺跡整備活用の視点が示された。史跡の整備活用は、学術的調査の成果を踏まえて実施するものであり、広大な大友氏遺跡の場合は、調査研究を継続しながらその成果を段階的に整備活用に反映させる、長期的な仕組みづくりが重要となる。さらに、大分市は市制100年を機に、「ふるさとの顔」として大友宗麟に注目し、大友氏の歴史の中から大分の魅力や個性を引き出す取り組みを構想している。現代の我々が引き継ぐべき宗麟の思想や理念を伝えつつ、創造的なまちづくりを実践する場所として、大友氏遺跡の果

たすべき役割に期待が集まっている。以上を踏まえ、大友氏遺跡の整備活用の考え方として、3つの視点を挙げる(図51上)。

そして、大友氏遺跡の整備活用を通じて、中世豊後を治めた大友氏の個性と魅力を伝えつつ、市民の根底に流れるコスモポリタニズムやチャレンジ精神の更なる覚醒を促し、県都大分の新しい文化創造の活力を生み出していけるよう、基本目標を設定した(図51下)。

あわせて、大友氏遺跡を構成する5つの遺跡についての地区別整備方針が示された点も重要である(図52)。

整備の目標や整備方針が定まり、これを基に基本計画が策定される。

整備基本計画 国指定史跡である大友氏遺跡の保存・活用を行い、その価値を次世代へと継承することを目的として定めるものである。本計画では、本市の個性と魅力を代表する大友氏遺跡を歴史公園として公開活用するために必要な適切な整備手法の設定、便益施設やガイダンス施設の設置などの基本的な考え方をまとめた。

平成27年度から15年間で第1期整備の計画期間とし、大友氏館跡を中心に短期整備を概ね5年、中期整備を概ね10年とした。短期整備では、庭園域を含む部分的な早期公開をめざす整備とした。

この計画に基づき、平成28年1月に「大友氏館跡庭園整備検討委員会」を設置し、庭園域の整備に向けて検討を開始した。また、平成28年6月には「史跡大友氏遺跡整備検討委員会」を設置し、大友氏遺跡全体の整備に向けた具体的な検討に着手する。

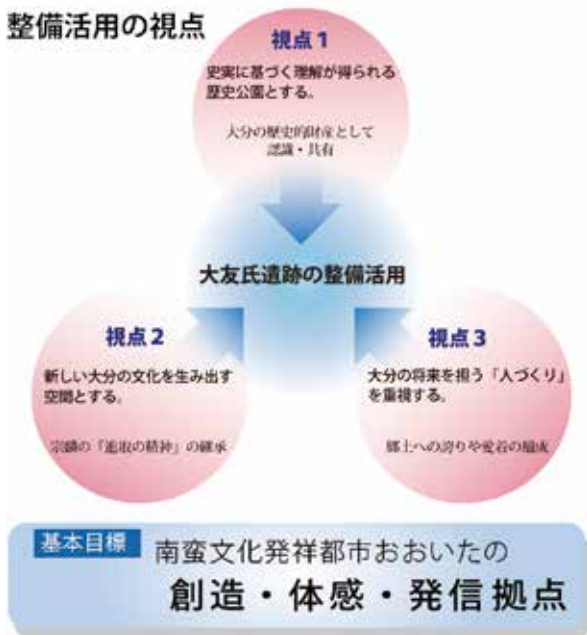


図51 整備活用の視点と基本目標

地区名	地区別の方針
大友氏館跡	大友氏遺跡のシンボル空間として復元整備を行う。 大名屋敷の壮大さ、あるいは政治・儀式(オモテ)の空間を表現する。このため、外郭・庭園・中心建物を含む東半部について重点的に調査・整備に取り組む。
旧万寿寺地区	大友氏の歴史や文化に親しむ交流空間として整備し、公開する。 ・当面は既存の施設を利用して、様々なイベントや学習機会を行う場として公開し、大友氏遺跡に関する施設としての定着を図る。 ・長期的な視点にたって北側エリアの都市構造や寺域内の施設配置等の調査を進め、遺構の保存を図ったうえで、平面表示等を行うものとする。
唐人町跡	通り空間の再現を目指す。 ・通りに面した、町並み景観を復元し、大友氏館跡東辺部との連続性を保ち、国道10号との一体的な沿道景観を創出する。(当面は史跡の追加指定と公有地化を進める。)
推定御蔵場跡	復元整備にむけた発掘調査を行う。(将来計画) ・当面は現状保存に努めつつ、長期的な視点にわたって復元整備にむけた発掘調査を行う。

図52 地区別の復元整備方針